

---

# 霸王

緒俐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

霸王

### 【Nコード】

N5428D

### 【作者名】

緒俐

### 【あらすじ】

幻想の国の魔法学園。そこに在籍するスズナは日々バトルに明け暮れていた。色気より食い気の彼女は、「霸王」を支える魔法使いになることを夢見ていた。そんなある日、幻想の国に大事件が起こる。ピンチになったスズナを助けたのは……

## 第一話：魔法学園

「わたしがあなたの翼になってあげる……」

幻想の国。

世界太古の古代都市は、今日も魔法の力に満ち溢れている。

かつては幾度となく戦場となったこの国も、

「メイリン」という美しき魔法の女神によって守られていた。

そして、今日も明日のメイリンになろうと、

魔法使いたちは「魔法学園」で精を出しているはずなのだが……

「はあ、やっぱり先輩はかっこいいわ……」

「本当ね、どこの御貴族かしら……」

女生徒の注目の的、「涼」という言葉が似合う少年は、

魔法書片手に歩いていた。

黒目黒髪 of 少し背が高く細い少年。

彼女たちのひとつ上の学年だ。

「だけど、それに引き換え……」

二階から見下ろすことのできる闘技場。

そこには身長2メートルはあるだろうという筋肉男と、

金髪の少女がバトルを繰り広げているのだ。

「スズナ！ お前に賭けてるんだから負けんな！」

「そんなドチビやつちまえ！」

それぞれの歓声と野次が飛び交う。

学園側も公認しているこの闘技場のバトルは、常にスズナのためにあると言っても過言ではなかった。

「オチビちゃん、痛い目にあう前にさっさと負けときな」

筋肉男はスズナを見下して言うが、

「冗談じゃないわ！ 今日のランチがかかてるの！  
負けてあげるつもりなんてさらさらないわ！」

勝気なエメラルドの目が筋肉男を睨みつける。  
白い肌には僅かばかりのアザはあるようだが、  
それも彼女のアクセサリーのひとつだ。  
いくつもの戦いが彼女を強くしたという証拠のよう。

「そうかい、学園一の魔法使いの座は俺のもんだ！」

突如別空間から出された一トンはある丸太。  
それをスズナめがけて振り下ろしてきたが、

「ハイヤア！！！」

スズナ蹴りが筋肉男の顎に入ると、その巨体は五メートルは宙に浮かんだ。

そして、完全に戦意を失ったのだ。

「勝者スズナ！」  
「イエーイ！」

スズナはガッツポーズを決めるのだった。

## 第二話：事件は突然に

「しあわせ〜！〜！」

すべての幸せはこのときのためにあるといわんばかりに、

スズナはスパゲティをたらふく頬張っていた。

それだけならいいものの、彼女のテーブルには、

大盛りカレーライスに特大チキン、さらにはケーキの数々が並べられている。

それだけこの少女は食べるのだ。

「スズナ・・・あんた胴衣が汚れてるわよ・・・」

親友のアイコが呆れながらいう。

ピンクの鮮やかな胴衣は、ミートソースですでに真っ赤だ。

これが華の十六歳の乙女の姿だとは思いたくもない。

「いいの！ これくらいの汚れなんてすぐにとれるんだからさ」

につこり笑ってスズナは答えた。

このおてんば少女にかかれば、

確かに全てはうまくいくといえはいくのだが・・・

「だけど、本当にあんたって色気より食い気ね。」

この歳になって恋バナの一つも聞いたことないわよ」

もう一人の親友のナナはアップルティを口に運びながら、  
いまだ恋の一つもしたことのないスズナにあきれ返るのだが、

「それもいいの！ 私は『霸王』に恋をするの！  
その辺の弱卒じゃ私の相手にならないわよ！」

『霸王』。それはこの世の全てを手にした最強の魔法使いに送られる称号。

かつて、女神「メイリン」が恋をした相手である。

しかし、その称号を手にするには、この世の秘宝を手にしなくてはならないのだが、

それが何なのか、現在となつては不明である。

なんせ、数千年も前の秘宝なのだから……

「たしかに、このじゃじゃ馬を躡けるにはそのくらい強くないとね」

「うんうん、一年の猛者どもならともかく、

「三年生までやつつけるなんて普通ありえないわよ」

それが今日の相手の筋肉男だった。

少なくとも、今日の相手はこの学園一の怪力自慢だったのだ。

それをスズナは一撃で倒したのである。

「本当、瑞貴様じゃないと勝てないかもね」

「瑞貴？ 誰それ？」

特大カレーを口に運びながらスズナは尋ねると、

二人はムンクの叫びのような表情になって驚いた。

「あ・あ・あ・あんた！ 瑞貴様を知らないの！」

「知らないっていつたじゃない」

「落ちていてる場合か！　瑞貴様はね！　この学園一の魔法使いよ！　容姿端麗、成績優秀、あんななんか足元にも及ばない天才魔道士！　それにきつと性格もいいに決まってるわ・・・だって、王子様

に違いないし」

二人が溶けていく。

しかし、スズナはまったく興味を示さなかった。

おそらく、ただのイケメンだと思っていたからだ。

「ふ〜ん。まっ、私に挑戦してこないなら別に関係ないや」

特大カレーを食べ終わり、次にチョコレートケーキに手を伸ばそうとした瞬間、

「えっ！」

突如、チョコレートケーキがテーブルから弾き飛ばされた。

「ちょっと、アイコ、そんな怒らなくたって!!」

抜群の反射神経にこれほど感謝したことはなかった。

ナナがスズナに斧を振り下ろしてきたのだ！

「ナナ！」

そしてスズナは感じたのだ。

この周り全ての人間が、自分の敵になったということに……

## 第二話：事件は突然に（後書き）

突然、夢に出てきた話なので、ぜひぜひ読んでやってください。



### 第三話：瑞貴

「アイコ！ ナナ！ みんな！」

次々とスズナに襲い掛かってくる友人たち。  
スズナはただ避けることしかできなかった。

青白い顔、白目、チアノーゼが出た唇、  
だが、全く衰えていない、

いや、いつもの数倍はあるだろう運動能力。  
いったい何の魔法にかかったのか、

スズナは自分の記憶を辿るが、じっくり考えている暇がない。

「し．．．．ね．．．．」

「きゃあああ！」

スズナは爆風で飛ばされ壁にたたきつけられる。  
頬から流血してくるのも感じられた。  
だが、それでも戦うことはできない。

「くっ！！」

頭がフラフラする。

しかし、休んでる暇はない。  
立てなくなれば本当に命はないからだ。

『せめてここから逃げなくちゃ．．．．！』

そう思考がまとまったが、

スズナが見た光景は最悪だった。

すでに食堂には数百人の群れが押し寄せてきていたからだ。その中には、高等魔法を扱えるものすら少なくはなかった。

「どうすればいい……！」

スズナは周りを見渡す。

どこかひとつでも突破口があれば、

そこを目指して走ればいい。

相手を気絶させる体力はある。

そして、彼女はあの筋肉男を見つけた。

「あそこだ！」

超スピードで筋肉男の顎を蹴り上げ道を作ろうと試みた。しかし、

「効いてない！」

スズナは一瞬にして悟った。

そして、その状況を見逃さないものはやはりいた。

「し……ね……」

「きゃあああ!!」

無数の魔法弾の直撃を受けたスズナは、再度壁際に戻され追い込まれる。

『……本当に、私、ダメ?』

朦朧とする意識は、ついに途切れかけた。

だが、それを一気に覚醒させるものが現れる。

「メテオ……」

感情のないテノールが聞こえたかと思うと、  
食堂はスズナを取り残して一気に崩れる。  
そして、現れたのだ。

瑞貴が……

#### 第四話：霸王を目指すもの

「この世界は終わった」

ただその言葉だけが彼女によぎっていた・・・

「おい、立てるか？」

瑞貴は手を差し伸べる。

確かおてんばで有名な「スズナ」という一つ年下の女だと彼の脳にはインプットされていた。

しかし、そのおてんば娘は全く動こうとしない。

「おい、何か反応を見せたらどうだ？」

再度声をかける。

普通の女子ならここで蕩けていた筈だが、今はそんな状況ではない。

「ったく！」

白い手がスズナの腕をつかもうとしたそのとき！

「やあああ！！！！」

「なっ！」

突如スズナは瑞貴に殴りかかってきた！

「お前は！」

次々に拳打が繰り出される。

しかし、瑞貴はそれを全て見切り避けていく。

「お前は！」

さらに繰り広げられる攻撃に、

さすがの瑞貴も受けざる終えなくなってきた。

いや、受けたほうが早いと思った。

スズナの拳を簡単にその手におさめる。

「お前が何だよ」

涙を流しながら攻撃してくるスズナを動けなくし、  
その凜とした黒曜石の目で見据えた。

「……………！ お前がアイコたちを殺したのか！！」

スズナは叫んだ！

そして、さらに拳打を繰り出そうとするが、  
瑞貴の魔法がそれをさせない。

悔しさで唇を噛み切る女に、瑞貴は告げた。

「違う。俺はあんたを助けたただけだ。とにかくここは危険だ。  
一気にここから移動するから、少しぐらい落ち着け」

「落ち着け……………！！」

『落ち着けるか！』と言おうとしたが、  
瑞貴はそれをさせなかった。

完全に自分の精神を操られている。

言葉を止められている。

それだけが事実だった。

「俺を信用しろ。俺は「瑞貴」。

『霸王』を目指すものだ」

そう告げて二人はその場から消えたのだった。

#### 第四話：覇王を目指すもの（後書き）

ようやく更新しました。遅くなってすみません。  
これからも楽しく読んでやってくださいませ。

## 第五話：喧嘩

「困ったことがあったら図書館にいけ」。

いつか誰かが言ってたはずだが、

それをこの状況で実行する人間が本当にいたらしい・・・

「まったく、手間のかかる女だな」

瑞貴はほとほと呆れながら抱えていたスズナを地へ下ろした。

「・・・悪かったわよ」

「いいえ、どういたしまして」

瑞貴は口元だけ微笑んだ。

「とりあえず、改めて自己紹介しておく。

俺は瑞貴。年はあんたより一つ上だ。

それと面倒なことは嫌いだから、

その辺よく理解しておけよ」

「それだけ？」

もつと自己紹介なら、得意な魔法とか、

戦術とかをこの状況なら話してもらいたいところだが・・・

「それだけでも何もこれ以上必要があるのか？」

「必要も何もこの国から抜け出すんでしょ？」

得意な術とかぐらい教えてくれてもいいじゃない」

「高等魔法のイロハも知らない奴に言っても仕方ねえよ。

俺の時空魔法でさえここまでしか飛べないんだ。



別の方法を考えないと・・・」

瑞貴は考え込むが、それをスズナが一言で遮った。

「やっぱり弱いんじゃないの？ あんた」

瞬時にゴン！という鈍い音がスズナの頭上に落とされた。

「いったあ！ 何すんのよ！」

「おてんば娘もほどにしとけよ！

お前強い魔法使いになるためにここにいるんじゃないのか！？」

「そうよ！ 私は強い魔法使いになりたいの！

ナルシストなんかに興味はないわ！

自信過剰の自惚れバカが一番嫌いなもの！」

「だれが自惚れてるんだよ！

お前なんかピーピー泣いてただけじゃないか！」

「当たり前じゃない！ 私は人間だもの！

悲しければ泣くし、嬉しければ笑うの！

あんたみたいなのと一緒にしないでよ！」

「ああ、そうかよ！ やっぱり助けるんじゃないかった！」

会って早々口論。

瑞貴のファンがここにいたならば、

まさか「涼やか」というイメージを持つ少年が、

ここまで熱くなれるとは思えない。

夢見た王子様が一気に崩れ去っていくだろう。

そして十分後……

「はあはあ！ 全く、これ以上やつてもしかたねえ。

とにかく、お前より俺のほうが断然強い！ それだけ分かっていろ」

「それも嫌！ だいたい、何で図書館なんかに来てるのよ！ もっと隠れるのに最適な場所があつたんじゃないの？」

確かにスズナの言う通りだった。

あくまでもこの幻想の国には、

結界を張った場所がいくらかもある。

それも地下に多い。

そこに逃げ込んだほうが安全といえは安全なのだが……

「簡単なことだ。俺たち以外まともな奴はいない。

第一、教師たちでさえやられてるんだ。

結界なんか一瞬のうちに消されるさ」

「そっか……」

案外素直なことに瑞貴は驚いた。

この少女は、正論を受け入れる器はあるらしい……

「だからここで脱出法を調べるんだ。

あいつらから発見される前にな」

「えっ……だったら私たち……」

そのときスズナはようやく気づいたのである。

「そうだよ、喧嘩してる場合じゃない。

さっさとこの膨大な本から俺たちに出来る方法でこの国から脱出する方法を探せ」

本に向き合った瑞貴は少し赤くなった。

少なくとも初めてだったのである。

これほど冷静を欠いてしまったことなど……

「冗談じゃないわよ……!!」

スズナの声が図書館にこだました……

## 第六話：悪い……

「私たちにでも出来る脱出方法か……」

スズナは本を前にしてじっくり考え始めた。

おてんばはやっていても読書量は人の三倍だ。

霸王を支える魔法使いになるには、

それ相応の頭脳は持ちたかったのである。

「その辺の本は俺も全て見たことがある。

少なくともこの国には今、

外に出られないように高等魔法が張り巡らされている。

簡単に言えば触れた瞬間に死んじまう様なやつな」

「突き破ることは？」

「それは可能だ。一転集中型はお前が得意だろ？」

普段のおてんば振りから、瑞貴はスズナの特技を見破っていた。

「じゃあ、後はどうやって国の端まで行くかね。

だったら、転送魔法陣があるかもしれない」

「現代に使われているものじゃ待ち伏せされてるだろう？」

「だったら古代のものは？」

スズナは古代地図を広げ始めた。

かなり年季が入った分厚い本は、

見ただけでもうんざりするが、

スズナは抵抗なく調べ始めた。

「古代文字か……所々しかわからねえな」

学年一優秀な少年も、数千年前の文字は解読できない。しかし、スズナは読んでいくうちに瞳を輝かせていく。希望はここにあったのだ！

「瑞貴！ これならいける！」

メイリン様の城に魔法転送陣がある！

あんたの時空魔法ならそこまで飛べるでしょ！？」

「お前、解読したのか？」

さすがの瑞貴も驚いたが、

「当たり前よ！ 私は霸王様に全ての力をささげるの！」

この程度の古代文字くらい解読できなくてどうするのって言うの

！」

「なるほど、俺のためか」

瑞貴はにやりと笑った。

自分が霸王を目指しているということは教えたはずだ。それをあわててスズナは訂正する。

「違うわよ！ 私は『霸王様』に全てを捧げるの！」

あんたみたいな弱いのがなんかに死んでも私は服従しない！」

必死に訂正するスズナに、瑞貴は爆笑を抑える。

どうやら、自分が思ってた以上に、

このおてんば娘は面白い存在なようだ。

「ああ、それでいい。とりあえずおてんば娘、しばらくの間力を溜めておけ。」

そして何があっても抵抗するな。  
約束できるか？」

黒曜石の目が真剣にスズナを見据えた。  
スズナはその目に威圧されまいと必死に抵抗し、

「分かったわ。頼んだわよ、瑞貴」

「よし、それじゃあ目を閉じてろ。

一気に飛ぶから絶対目を開けるな。  
開けたら酔うからな」

時空間を飛ぶ時の景色は、はつきり言ってゆがんでいる。  
それだけ気分が悪くなる可能性もありうるのだ。

「それと、悪い……」

次の瞬間、瑞貴はスズナに口付けていた。

そして、二人はその場から消えたのである……

## 第七話：死なせない

「キスの味はレモン味」

一体どこの誰がそんなことを言ったのか、人生初のキスでそんなことを考えたのは、おそらく自分だけなんだろう・・・

「あ・・・・・・・・」

目を閉じてはいると言われたが、それはあくまで時空間の中で酔わないため。

決してこの男にキスされるためではなかったはずである。

そしてやはりお決まりで、スズナは思いつき瑞貴の頬を殴り飛ばした。

「お前は何をした・・・・・・・・！」

真っ赤な顔を向けて、スズナは瑞貴を睨み付ける。

目は少し涙目だということも、自分の感覚にあった。

そして、相変わらずしれっとした顔で瑞貴は答える。

「だから悪いって言っただろう？」

「悪いで済むか・・・・・・・・！」

もう一発殴ろうとしたとき、

瑞貴の体はぐらりとスズナの方に倒れてきた。

「ちょっと、瑞貴・・・・・・・・？」

突然のことに、スズナは驚くが、  
その体の熱さと呼吸で気づいたのだ。

「あんたすごい熱じゃない！　いったいどうして!？」  
「・・・力使いすぎた」

それだけ告げれば十分だった。  
しかし、介抱する時間はなかったのである。  
自分たちの追っ手が、メイリンの城の中にまで入り込んできたのだから・・・

「し・・・ね・・・」  
「アイコ！　ナナ！」

さつき瑞貴が使った高等魔法で、  
さすがに動けなくなっていたはずの友人たちは、  
ボロボロになりながらも再度自分たちに襲い掛かってくるのだ。  
急いでスズナは瑞貴を背負い、転送陣のある部屋まで走ろうとしたが、

「おてんば娘・・・俺に気にせずさっさといけ」

苦しそうな声で瑞貴は言う。

「あんた何言って」  
「だったら戦え。ここは聖地だ。あいつらもそこまでは力は奮えないだろう」

邪悪なものを寄せ付けない城。



しかし、彼らはその力を打ち破り、  
この城に入り込んだのである。  
多少の力の制御はあるにしても、  
危険なことには違いない。

「ふざけないで！ あんた背負ったまま戦えないわよ！」

瑞貴の盾になるように、スズナは相手の出方を伺うが、  
それに瑞貴は怒鳴った！

「死にたいのか！ 転送陣はすぐそこなんだ！  
バリアを破る力さえ残しておけば良いなら簡単だろう！」  
「それも嫌だと言ってるの！ あんたは霸王になるんでしょう！  
こんなところで死なせたりはしない！」

スズナは言い切った。  
ここまできて、自分一人だけ生き残っても、  
後悔することだけはしたくなかったのだ。

「さっきまで弱いとしか言わなかった癖によ……」

僅かばかり瑞貴は微笑を浮かべた。

「し……ね！」

再度友人たちが襲ってくる。  
スズナはその攻撃をかわしながら、  
少しずつ転送陣の部屋へと向かっていく。

「くっ！」

拳打が肋骨にあたるが、倒れている場合じゃない。  
そして、スズナは瑞貴に告げた。

「転送陣まで走る！ それぐらいの振動には耐えなさいよ！」

そう叫んでスズナは友人たちの群れを飛び越した。  
しかし、無数の魔法弾がスズナを傷付ける。

「いたっ！」

自分はここまで辛抱強かったことなどなかった。  
だが、せつかく生き残っている瑞貴をこのまま死なせたくないと思っ  
た。

「きゃあ！」

並べてある女神像がスズナたちに投げられ粉碎する。  
そしてそれをよけていくうちに、道は消えていく。

「囲まれた………！」

じりじり詰め寄ってくる友人たち。  
今度こそ逃げ場はない。

「スズナ……上出来だ」

にやりと笑い、二人の体は光に包まれる。

「えっ！」

そこは魔法陣の中。二人は一気に国境の近くまで転送された。

## 第八話：スズナ・メイリン

「瑞貴！」

ついにバリアを目前としたが、瑞貴の意識はすでになかった。間違いなく、魔力を全て使い切ったのだろう。

「待つてなさいよ。こんな奴なんて即効で砕いてやるんだから！」

パリーン言う音とともに、二人はようやく幻想の国から抜け出した。

だが、それでも悪夢は終わらなかった。

「冗談でしょう……？」

ホッとしたのも束の間だった。

バリアを砕いたといっても、追っ手が止まる訳がなかったのだ。

「くそっ！ こっちはもうボロボロだって言うのに……！」

瑞貴を地面に寝かせ、少しだけでも攻撃から守るために、自分の魔力を全て使って結界を張った。

「瑞貴、せめてあんなだけでも守ってあげないとね」

その思いだけが彼女を突き動かす。

「やああああ！」

持てる根性を全て使って、スズナは立ち向かっていく。  
しかし、攻撃をよけることも出来ない体は、  
あっさりと崩された。

「あっ・・・・・・・・！」

後頭部のダメージが意識を薄れさせていく。  
そして脳裏に言葉を流した。

「今日で私は終わるの・・・・・・・・？」

自分の死を本気で覚悟した。  
しかし、目の前に救世主が現れたのである。

「剣技・・・・渦潮！」

人の声が掻き消されるほどの風の轟音。  
一瞬にして吹き飛ばされた追っ手たち。  
その風の中から、人の気配が感じられた。

「えっ・・・・・・・・？」

スズナの目の前に二刀流の一人の青年が現れた。  
背が高く、黒に青が混ざったような髪色、  
そして黒の拳法着がぼんやりとした意識に流れ込んでくる。

「まったく、戻ってくればこの様とは・・・・  
修行し直したほうがいいみたいだな、瑞貴」

「かつこいい声」なんてものがこの世にあるなら、

きっとこの男のことを言うんだろう。  
とても心地よい声は、少しずつ遠ざかっていく。

「ほう、この国の状態で死んでないとはたいしたもんだが……」

青年はスズナを見て一瞬止まる。  
彼女はまさか……

「瑞貴を……」

「ん？」

「霸王を助けなさい……！」

エメラルドの目が青年を射抜いた。

そしてスズナは気を失ったのである……

「たいした根性を持っているようだな……  
畏まりました、スズナ・メイリン殿」

そして青年はスズナたちを抱え、  
一瞬のうちにその場から消えたのである。

## 第九話：復活

コトコトとスープを煮込む音がする。  
ポトフを作ってるんだろう。

自分の仲間であるあの二十歳の割には爺くさい男が……

「ここは……」

宿屋の一室。畳のにおいがやけにしている。  
自分は現実には生きているのだと感じられた。

「空の国だ。よく寝ていたな、瑞貴」

自分と同じ黒の目が覗き込んでくる。

それは半分呆れているようだ。

そして覚醒した！

「ヤンロン！」

自分に事あるごとにとことん説教をしてくる理屈人間。

自分の親でさえここまで言わなかったと思ったことなど星の数ほど。

しかし、誰よりも頼りになる仲間だ。

「まったく、俺が戻ってきたからよかったものの、  
もし戻ってこなかったらどうするつもりだったんだ？」

早速小言が始まりそうだ。

言い訳しても仕方ないと分かっているのだが、  
してしまうのはまだ自分が子供だから。

「いや、何とかなるとは思っていたんだが……」

それ以上は言わないだけ学習してきた。  
自分が感情人間じゃなかったことが救いようだ。

「それにだ、あのお方を危険な目に合わせていたとは、  
未来の霸王が聞いてあきれるというもんだ」

説教モードにエンジンがかかりだした。  
しかし、瑞貴はふと疑問を声にした。

「あのお方？　おい！　おてんば娘はどうしたんだ！  
「おてんば娘？」

瑞貴の突然の慌てようにもヤンロンは落ち着いている。  
それと対極的に瑞貴は説明した。

「そうだ！　いかにも体育会系の怪力おてんば娘だ！」

「それって私のこと？」

「そうだ。こんな感じの……！」

次の瞬間、スズナの強烈な拳打が瑞貴目掛けて振り下ろされたが、

「何故避ける！」

「あたったら痛いからだろう？」

「当たり前さかいよ！」



無事に再会した二人は、やはり普通に感動をかみ締めるわけには  
いかなかった。

ヤンロンも、これが自分に命じた少女だとは思えなかったが・・・

そして数分の攻防の後、瑞貴はスズナの拳を止めて尋ねることに  
した。

「おい、おてんば娘。お前名前は？」

「知ってたんじゃないの？ スズナって自分でいってたでしょ？」

転送陣に入る前、確かに自分の名を瑞貴が呼んだことは覚えてい  
た。

しかし、瑞貴は真剣な表情で聞く。

「違う、正式名だ」

「うっ！」とした言葉が思わず出そうな表情で、  
スズナは小さな声で答えた。

「…………スズナ・メイリン。幻想の国の女神、メイリン様の子孫  
よ…………一応」

瑞貴は爆弾が投下されたような衝撃を受けた！

女神の子孫、しかも名高きメイリンの子孫だというのだ！

「…………どおりで…………操られなかったはずだよ、お前が…………」

瑞貴は全て納得した。

メイリンの子孫というなら、しかももとの魔力が高いスズナ

ならば、

助かる可能性は間違いなく高かったのである。

しかし、スズナはどうして自分だけが助かったのかが分からずにいた。

スツと瑞貴から拳をはなし、ヤンロンに向き合つと、

「とりあえずヤンロン、幻想の国に何が起きたか教えて欲しいの」

そして、ヤンロンの口から全てが語られるのだった・・・  
とても長い長いいきさつが・・・

## 第十話：長い長い話と敵の存在

何かがおかしい・・・

自分は幻想の国に起きたことを聞いたかっただけなのに、  
どうして幻想の国の歴史まで聞かされているのだろう。

それもこんなに懇切丁寧な説教口調で・・・

「瑞貴、スズナ！ まだ説明は終わってないぞ！」

「いや、ヤンロン、霸王とメイリンは恋人同士だったことなんてどうでもいいから、

それよりもスズナは、幻想の国に起きたことを聞きたいだけなんじゃないのか？」

半分魂が抜けている瑞貴に対して、スズナは冥土が見えているようだ。

おそらく堅い話など苦手なんだろう。

「馬鹿者！ 霸王とメイリンの関係なしに幻想の国のことが語られるわけがなかるう！」

「どうにかしてくれ！」と瑞貴は心の底から叫んだ。

しかし、ここでようやく本題に入ったのである。

「霸王とメイリン、そしてその仲間たちは奴等にとって脅威だった」

スズナの魂が少しだけ戻ってきた。

「奴等って？」

その問いに一呼吸をおいてヤンロンは答える。

「悪魔の存在を信じるか？ 幻想の国では疫病神という名だったか」

「悪魔って……！ ちょっと待ってよ！

神とか悪魔とか言っても、

それはあくまでもファンタジーの世界の話でしょ？

メイリン様だってもとはただの人間で、

祭り上げられたから女神となっただけ。

その証拠が私じゃない！」

スズナの言うとおりだった。

いくら信心深い幻想の国でも、

それらが現在に実在するなどとは考えない。

「それを信じさせるために前置きをしたんだ。

「悪魔」というものは実在する。

女神ももちろん実在しているんだ。

その証拠が幻想の国におきた事件だ。

『ドール』。操り人形と化す症状を引き起こしたのも奴等なんだよ。

メイリンの子孫ならその程度の魔法知識はあったはずだろう？」

「それは……」

確かに知っていた。

しかし、そのような古代の高等魔法が使えるものなど、

この現在にいるかどうかは疑わしい。

それも古の悪魔となど誰が信じるだろう。

「だからこそ俺たちは戦うしかない」

「戦う？」

スズナは瑞貴を見た。

その目は戦いを求めるものの目だ。

「こういう展開は決まっているだろう？」

悪魔をぶっ倒す！

そして俺は霸王になるんだよ。

伝説にするんだよ、俺たちの存在をさ」

予測はしていたが、やはりそのような展開になるらしい・・・

## 第十一話：甘い罠

「伝説」。口で言うのは簡単だが、それをやり遂げようという人間はこの現代にそう存在しない。ましてや御伽噺の世界を現実にしようというものなど……

「あなた……頭おかしくなった？」

スズナの一言に瑞貴は首をかしげた。どうやら計算違いが生じたようである。

「霸王を目指すまでは賛成してあげるわ。

だけど、私は伝説になりたいとかそこまで熱くなれないわよ？」

「おっかしいなあ……？」

瑞貴は腕組みを始めた。

「お前みたいなタイプってこういう熱いものに惹かれるんじゃないかな？  
つたっけ？」

「確かに。だが、メイリン様の血を少なからずとも引いているんだ。」

もつと論理的に仲間に勧誘するべきじゃないのか？」

二人の男がありとあらゆる策を練っている。

「ちよつと二人とも……！！  
一体私を何だと思ってるの？」

怒りが爆発しそうなスズナに、  
二人はしれつとして答えた。

「おてんば娘だろう??」

「あんたたちなんか……!!」

それだけ言つて、スズナは外へ飛び出していった。

「……からかいすぎたか？」

ヤンロンが少しだけ反省すると、

「間違いないな。だが、こんなギャグも飛ばせなくなるんだ。

あいつは引きずつてでも俺たちの仲間にする。

古代文字を解読できるものがまだ残ってるなんて奴等に知れたら、  
スズナは殺されるぜ。それに、あの文字を誰が教えたのかも気になるしな」

「……とりあえずこの国は安全なほうだ。

飯がすみ次第、スズナと合流しよう」

ヤンロンは立ち上がり、ポトフを皿によそい始めた。

一方スズナは……

「もう!! あんなやつらなんか知らないわよ!  
人を馬鹿にするにも大概にしるつての!!」

怒りを丸出しにして、スズナは歩く。

少しでもまともな奴等だと思つた自分が愚かだったとも考えなが

ら・・・

「お嬢ちゃん！　うちの店によっていけないかい？」

「何なのよ！」

いかにもヤンキー丸出しな格好をした男が、スズナに声をかけてきた。

「気の強いお嬢ちゃんだな。」

だが、そういう子がうちでばる儲けするんだよね！」

そして取り出したトランプ。

「簡単なことさ。ポーカーで一儲けしないかい？」

誘われた甘い罠。

しかし、何も食べずに外に出てきたスズナは、簡単にその罠に乗るのだった。

「いいわよ。勝負は大好きなの！」

勝気な笑みを浮かべ、スズナは店に入ってしまった・・・



## 第十二話：馬鹿者！

人生に困難はつきもの。

ただどこまで不運が続くとはスズナは思わなかった。  
まさか、自分が景品になる日が来るなど…

「お嬢ちゃん、負けた分は体で払ってもらおうか？」

店主の笑みが気持ち悪い。

このまま目の前の奴らを抹殺することは可能。  
しかし、今回は明らかに自分が悪い。  
やけにならなければよかったと反省する。

「分かったわよ。どこのどいつを倒してほしいの？  
負けた分くらいは働くわ」

肉体労働ならまだいける。

それにごまかしをきかせる自信もあった。  
しかし、店主はやはり引きはしない。

「お嬢ちゃん、冗談はいいからさ…  
早速どこに売るか決めて…！！」

次の瞬間、スズナは机一つを完全に粉砕した。  
これには辺りが騒々しくなる。

「私は強いわよ！用心棒にはもってこいじゃない？」

勝気な笑みをスズナは浮かべた。

しかし、少しだけ店主はあつけにとられたがすぐに話を戻した。

「…わかった。だが、君に求めているのは色気の方だ。

少し大人しくしていてくれ」

「嫌よ！」

スツと首筋に刃が当たる。

この店の雇い剣客だ。

戦えば無事では済まされないほどの達人だということは、  
どんな戦いの素人でも感じられるほどの・・・

『ちっ！ 逃げられないか…!!』

さすがに本気で戦うことを決意するしかなかったが、

「はい、いらっしやいますー!!」

新たな力モがかかったといわんばかりに、

店の従業員達にはこやかに接客を始めたが、

「俺達は客じゃない。ここにおてんば娘が来てないか？

いかにも怪力そうな奴だが」

「瑞貴！ ヤンロン！」

そこに入ってきたのは、さっきまで一緒にいた二人だった。

しかし、からかわれ放題だった二人の怒りは収まっていなかったが、  
逃げ出すチャンスが出てきたのである。

「なんだ、いたのか。さっさと旅に出るぞ。

落ち合う予定の奴もいるんだからよ」

悪びれた様子もないが、逃げ出すチャンスだ！  
とびっきりの笑顔で二人の元に走ろうとしたが……

「ちょっと待てよ」

剣客はスズナの前に立ちはだかる。

ヤンロンはそれを見て二本の刀を抜こうとしたが、

「お連れさん、このお嬢さんは今景品になっている。  
金が払えないというのならお引取り願おう」

剣客のまっすぐな目がヤンロンの刀を引かせたが、  
瑞貴の怒りを鎮めることは出来なかった。

そしてそれは爆発する！

「スズナ……！！ お前はどこまで馬鹿なんだ……！！

宇宙一か！？ 史上空前の超絶馬鹿か……！！」

「悪かったわよ……！！ だけどカッとなったのはあんたたちの性じゃない……！！」

いつもならここで瑞貴は言い返すが、  
今回は少し止まった。

そして微笑を浮かべ、

「……いや……そうだな、それは謝るよ。

とにかく景品は貰いたいしな。

いうことなんでも聞いてくれる可能性もあるし……」

「待ってる。すぐに貰ってやるからよ」  
「いやゝ！！！」

これまでにない悪戯な笑みは、スズナを最悪の状況に追い込むこと間違いなしだった。

### 第十三話：ポーカー

世の中にせこい奴はいくらでもいる。

今、スズナが立たされている現状はまさしくその象徴のよう。

しかし、世の中には何でも出来る奴がいるものである。

それがインチキポーカーだとしても勝てる奴等が……

「獲物は？」

黒い目が本当に光った気がした。

スズナはどう考えても瑞貴が負ける姿が予測できない。

「こいつだ。ポーカーは知ってるだろう？」

店主自らトランプを取り出す。

どうやら瑞貴の気迫に触発されたようだ。

せっかく入った少女を、ガキに取られるわけにはいかなかった。

スズナは磨けば光る。それだけは間違いなかったのだから……

「もちろんだ。ヤンロン、お前は？」

瑞貴は少し目線を高くしてたずねると

「問題解決は早いほうがいい。

スズナはいくら負けたんだ？」

「百万だ」

「随分高いな。スズナの価値」

それを聞いてスズナはすぐにも殴ってやりたくなったが、

ずっと瑞貴の目が静かな光を帯び始め何も言えなくなった。  
木の椅子に座るその動作が、まるでその辺の人間じゃなくなった  
ようで……

「俺たちの旅費も稼がせてもらっ  
どうせなら贅沢にやりたいからな」  
「そうだな」

二人の勝気な笑みと同時に、カードは配られた。

そして数十分後……

「ロイヤルストレートスラッシュ!!」

同時に発せられる声。

それは瑞貴とヤンロンのもだった。

「相手にもならねえな」  
「全くだ」

恐るべきロイヤルストレートスラッシュを何度も炸裂させる二人  
は、

スズナの負け分の倍以上は取り返していた。  
自分たちがどれだけインチキをやるうとしても、  
カード自体が手元に来ない。  
そんな状況が続いていたのだ。

「さあ、これで十分だ。  
スズナをさっさと返せ」

スズナの負け分を店主の前にポンと置く。  
しかし、引くはずがなかった。

「おい！ あいつらを始末しろ！！」

雇われていた剣客に店主は命ずるが、

「私は勝負事に関しては正当でいる。  
今回は彼らの勝ちだ。  
私が斬る理由などない」

そう言つて奥へと引つ込む。

「そういう事だ。さつさと返してもらおうか」

瑞貴は爆発寸前だった。

これ以上拒めば今にもこの店を破壊しそうな殺気を放つて……

「……くっ！！ 死ね！！」

一瞬にして店主は銃を抜き、瑞貴に向けて発砲した！  
従業員たちもヤンロンに立ち向かっていく！  
だが……

「ぐはっ！！」

「うわっ！！」

やられたのは店主たちのほうだった。

刹那という時間に、ヤンロンはこの場にいたものすべてを斬つて

いたのだ。

「もう一度だけ言う」

瑞貴は店主が落とした銃を拾う。  
そして全てを威圧していった。

「スズナをさっさと返せ！」

額に突きつけられた銃に汗が伝っていった……



## 第十四話：セディ登場

どこにいても面倒に巻き込まれるやつほど、

自分の人生に張り合いを与えるものもいないと分かっている、  
今回自分が仲間になろうと思う女は、

今まで出会ってきた女の中で最強の部類に入るかもしれない。

「はあ！！ 先に貰われただど！？ どこの悪趣味だ！！」

店員の襟首を掴んで瑞貴は攻め立てた！

せつかく稼いだ金も、無駄にはなりはしないものの、  
使い道の計画が崩れるというものだ。

「少し落ち着け、瑞貴。」

それで、どんな女だったんだ？

「女？ お前何言ってるんだ？」

性別を特定できるなど、

ましてや女などどうしてたずねる事が出来るのだろうか？

「さっきの剣士だろ？ あの覇気、どこかで感じた気がしてな」

それだけ言うと、瑞貴もなんとなく誰が連れて行ったのか予測が  
つき始めた。

たしかに、ヤンロンと対峙できる者など、早々いないものである。

「それが偉い美人なんだ！ 金髪に青い目をしたよ！」

そう答えると、瑞貴は大きなため息をついた。  
もうあいつしかない！

「ちっ！　せっかくあのおてんば娘を大人しくさせようと思った  
のによ！」

さまざまな計画をめぐらせていた瑞貴は、  
先を越されたといわんばかりに口を尖らせる。  
しかし、それに突っ込んだ人物は現れた。

「あらあら、それは可哀相じゃないの？  
人の個性は認めてあげなくちゃダメじゃない」  
「なっ！！！」

気配すら感じさせなかった人物の登場に、  
ヤンロンは「やっぱりか……」という表情を浮かべた。

「この人です！　あの娘を貰っていったのは！」

店員は女を指差して言う。

金髪に青い目をした美女、セディ・フローラだった。  
全体的にふんわりしているが、とてもしっかりした女に見える。  
おそらく、腰に帯びた細剣がそうさせているのだろうが。

「瑞貴、女の子は大切にしておげなくちゃいけませんよ。  
お姉さんそんな子に育てた覚えは……」

「分かったよ！　で、一体どこにやっただんだ！」

もはや姉と弟である。

その掛け合いも実に数ヶ月ぶりというところだろうか。

弟分の瑞貴の態度に、セディはクスクス笑いながら答えた。

「フフツ！ お姫様になれるところ。

それより、長が早く戻ってくるように言っているわ。

私たちに幻想の国を滅ぼした悪魔たちを抹殺せよとの指令が下つてね」

青い目が冷たくなった。

それは瑞貴とヤンロンの表情も同じ。

「スズナちゃんにも手伝わせるように命じられているの。構わないわね、瑞貴」

それは少しだけ心配そうな目。

しかし、断るわけにはいかない。

それが霸王としての使命なのだから……

「スズナには俺がすべて話す。

セディの趣味で武装させてるんだろっ？

はやくスズナの元へ連れて行け」

時は動き出す……

## 第十五話：仲間だもの

ほんの一時前に出会った剣士は女で、いきなり抱きしめられたかと思えば、こんな格好をさせられているのである……

「大変お似合いですわ、スズナ様」

どこかの王宮の侍女のような口ぶりで、自分とそう歳も代わりそうにない少女が言った。

「かわいいんだけど……窮屈」

真っ赤なチャイナドレスは、少しだけスズナを締め付けていた。普段、ピンクの胴衣しか着ていなかった彼女からすれば、ワンピースさえ窮屈に感じてしまうのだ。

「お許しくださいませ。」

セディ様はスズナ様と瑞貴様のことを思っておられます。私どもはその命令を全うするためにいるのですから」

やはりセディはどこかのお嬢様だと思った。しかし、一つだけ疑問に思う。

「ねえ、瑞貴様ってあいつはそんなに偉いやつなの？」

たしかにどこか気品はあっても、あの性格は最悪もいところだ。

お坊ちゃまなら、もう少し上等なものも着ていそうだ。  
白シャツに黒の長ズボンとはいかないだろう。

「それは」

「偉いに決まってるだろう。」

お前の失態の尻拭いをしてやったあたりよ」

その声に悪寒が走った。

間違いなくあいつだ。

「瑞貴……」

コチコチとした動作が痛々しく感じる。

しかし、そんなことも気にせず、

セディは甲高い声を上げて抱きついた。

「きゃあああ！ やっぱリスズナちゃんかわいい！

私のセンスに狂いはなかったわ！

二人ともそう思うでしょ？」

おそらく否定でもしたら殺されることを知っていたヤンロンは、

「うむ、馬子にも衣装だな……」

彼にしたら立派な逃げ言葉である。

もともとがそう人をほめることもないので、

セディはそれで満足した。

「瑞貴はどう思うの？」

そうたずねられて、瑞貴は真顔でスズナに近づいてきた。

「……………なによ」

スズナはさすがに何も言える立場ではなくなった。  
今回ばかりの否は確実に自分にある。

どれだけ嫌味を言われるかと思ったが、

「お前な、胸ない癖してこんな詰め物してない…」

時が完全に止まった。

自分の胸にあるのはこの世で一番大嫌いな奴の手。  
今それを確信した。

しかし、それをどかそうともしない。

それにスズナはキレた！！

「やっぱり……………あんただけは死ね！！」

二人の乱闘が始まる。

それを見てセディはニコニコしているが、  
ヤンロンは呆れながらも気づいていた。

「すぐに長に会わせるつもりか？」

あの服、「光の糸」で作り上げたものだろう」

「あら、気づいてたの？」

意外といわんばかりに、

しかし、さすがという表情をセディはヤンロンに向けた。

「まあな。正装させてる時点で思っていたさ。」

だが、神も悪魔も信じない奴にとっては、俺たちの世界は信じ難いものじゃないのか？」

ヤンロンの言うことは正論。  
しかし、セディは微笑むと、

「大丈夫よ。瑞貴とすっかり仲良くなっちゃんだんですよ。  
それに、これから一緒に戦っていく仲間だもの。  
絶対受け入れてくれるわ。  
メイリンの子孫なんだから」

スズナと瑞貴の乱闘を見守りながら、  
これからの未来を思うのであった。

## 第十六話：天界へ

この世界には地界と天界がある。

スズナが住んでいた幻想の国は地界にあたり、  
瑞貴たちの故郷は天界になる・・・

「天の国？ そんなの聞いたことないわ」

せつかくのチャイナドレスが着崩れている。

せめて破らなかつただけ良い方だと思っしかない、  
まさにその状態だった。

「そりゃないだろう。俺たちとお前の世界は違っただからよ」

スズナと乱闘を繰り広げていたにもかかわらず、  
瑞貴は汗一つもかいていなかった。

それが少しだけ憎らしい。

「スズナ、天界の存在は聞いたことあるだろう？」

「うん、神様が住む場所でしょ。  
だけどそれが実在するの？」

もつともな疑問をスズナはヤンロンにぶつけると、

「ある。事実、俺たちは天界の生まれだ。

そしてこれからお前には俺たちの長に会ってもらっ  
「ちよっと待て！ 俺は反対だ！」

瑞貴は意見した。



「あんな頑固爺にスズナを会わせたりなんかしたら、  
国一つ滅びる騒ぎだって起きかねない！  
だいたい、いくらメイリンの子孫だといっても、  
覇王の血も引き継いでるんだ。  
どうなるかは目に見えてるだろう」

スズナは話が見えなくなつた。  
ただ天界が存在し、彼らの長に会わなければならないこと、  
そしてそれを瑞貴が反対していることだけが分かった。

「だけどそうも言っていていられないでしょう。  
長だつてそれくらいは分かつてるはずだわ。  
幻想の国が滅びたこと自体、

天界にとつても衝撃が走つたのに変わりないもの。  
スズナちゃんを私たちの仲間に引き込むならなおさら。  
これだけはお姉さんも譲りませんからね！」

天界人同士の口論が繰り広げられる。  
まだ神も悪魔も何も信じられない状況にいる自分にとって、  
とてもついていけるはずのない話題。  
だが、スズナの口は自然と開いた。

「ねえ、私を天界に連れて行つて。  
行かなくちゃいけない気がする」  
「スズナ……」

エメラルドグリーンの目はどこか虚ろだつた。  
しかし、それは間違いない今の状況から進まなくてはならない、  
そんな気がしていたからだ。

「長だかなんだか分からないけど、頑固爺くらいなら相手ができそう。だいたい、最近不幸続きなんだから、神様に文句を言いたいところだわ!」

久しぶりに自分らしい言葉を言った気がする。  
幻想の国が滅びる前まで、

スズナはそんな自分に違いなかった。

「そういうわけだから、  
瑞貴、どうせあんたが天界まで飛べるんでしょう?  
さっさと連れて行きなさい!」

勝気な顔。

それは彼女のアクセサリーそのもの。

「・・・あんまりおてんば根性出すなよ。  
メイリンはおしとやかな美人だったみたいだからよ」  
「あら、そんなの私らしくないじゃない」

それを聞いてセディはくすくす笑った。

「瑞貴、あなたの負けね。  
それじゃ、早速行きましょうか。  
長のところへ殴りこみに!」

スズナのまねをしてセディは言う。  
そして、四つの影は天界へと向かうのであった……

## 第十七話：仙人降臨

「ここが天界……」

スズナはついた早々、自分と同じ目の色をした空を見て溜息をついた。

そしてぼんやり見えるのは、  
幻想の国にある「メイリンの城」と似た建物。

「あの城に俺達の長はいる。  
それと言つとくが、絶対おてんばやんなよ。  
めんどくさいことになる」

それだけを心配そうに、  
いや面倒くさそうな顔をして瑞貴はスズナに告げると、

「大丈夫よ。ただ、頑固爺に殴り込めば言いだけでしょ？」  
「挨拶といえんのか」

それにヤンロンがツツコミを入れる。

「瑞貴、お前もすぐに喧嘩腰になるんじゃないぞ。

兵士たるもの、常に礼節をわきまえろ！」

「ヤンロン、それくらいにしてあげなさい。  
スズナちゃん、空は飛べる？」

セディがたずねると、

「多少はね。十分ももたないけど」

「充分。それじゃ、いきましょか」

その瞬間、スズナをおいて三つの影が一瞬に消えた。

「えっ？ もうあんなとこに！！」

それはとんでもない速さだった。

自分は幻想の国にいたとき、

学年で一番速い飛行術を持っていたのにもかかわらず、  
目の前にいる三人は遥か彼方にいるのだ。

「ちょっと待ってよ！！」

スズナはさらにスピードを上げるのだった。

そして五分後……

「情けねえな。あの程度の距離でバテてるのか？」

「うむ、まだ修行が足りないようだな」

城には着いたものの、とても歩けそうにない。

「あんだ達が速すぎるのよ！！」

その声を聞いて、城から女達が次々と出てきた。  
どの女も、お姫様のような格好をしている。  
それも和服から洋装まで様々だ。

「瑞貴様！ ヤンロン様！」

お帰りになられてたのですか!!」

また「様」だ。

ただの兵士に様付けなど、  
いったいこの天界はどうなっているのか……

「セディ様もお疲れ様でした」

少しだけ女達の声が落ち着く。  
敬意を示すものへ向けられる声だ。

「それより、その地界のお嬢様は何者でございますの?」

視線がスズナに集まる。

スズナはさすがにセディの後ろに隠れた。  
なんとなく嫌な予感がしたのだ。

「スズナ・メイリン。俺の婚約者だ。  
だから何かあれば!!」

瑞貴の殺気で女達は一斉にその場に崩れた。  
それは逆らうことを認めない目……  
だが……

「何が……あんたの婚約者だ!!!!」

スズナの飛び蹴りが空を切る!  
そして瑞貴はその口を押さえると、

「いいから大人しくしとけ!

そういうことだジジイ！

聞いてるならさっさと出て来い！」

反抗的な目は、天井に向けられる。

そして白の衣を着た仙人が降臨したのだ。

「相変わらずのわがままか。

困ったガキじゃの」

ヤンロンとセディは溜息をついた・・・

## 第十八話：口論勃発

「お久しぶりです、長」

「お元気そうですね」

ヤンロンとセディは月並みな挨拶をすると、

「相変わらず瑞貴を甘やかしているようじゃの。  
地界人を婚約者にするなど馬鹿げた話じゃ」

あきれてものも言えんという表情を浮かべて、  
仙人は小さくため息をついた。  
しかし、それに瑞貴は突っかかる。

「霸王だって地界人じゃねえか。女神はその地界人に惚れたんだろ」

これは天界でも有名な話だった。  
かつて女神・メイリンは地界の男に恋をした。  
それが霸王であるというのは、  
この世界でもちよつとした昔話になっているのである。

「・・・メイリンは天界から追放された身じゃ。今更」

「ええっ！！メイリン様は天界人だったの！？」

今度はスズナが驚きの声を上げた。

「言っただろう。きいてかったのか？」

ヤンロンは不服そうに言う。

自分が懇切丁寧に、  
さらには幻想の国の歴史まで絡めて説明したのに、  
スズナはまったく覚えてないのだという。

「寝てた……」

少し悪びれた顔をしてスズナは答えると、

「まったく、お前といい瑞貴といい、  
人の話を聞くとという当たり前の常識すら守れないのか！」  
「はいはい、ヤンロン。お説教は後にしましょう」

これ以上ややこしくなりたくないので、  
セディはヤンロンを諫めた。

その気に乗じるかのように、スズナは話を一転させる。

「それより、私達に幻想の国を滅ぼした悪魔を退治するように命令  
するんでしょ？」

さつさと教えてよ、おじいちゃん」

周り全てが凍りついた。

仙人に向かつて「おじいちゃん」呼ばわりする強者が、  
この天界に瑞貴以外いたのである。

「なっ！ 薄汚い地界人が偉そうな口を叩くな！」

「薄汚いですって！ これでもお風呂は大好きなのよ！」

「屁理屈を抜かすな！」

野蛮な地界人が天界に足を踏み入れることすら間違いじゃ！」

「私はスズナ・メイリン！ 天界の血も引いてるわよ！  
それに霸王に世界が救われてるなら、



天界人だつて威張れないわよ！」

かつてここまで仙人と口論を繰り広げたものがいただろうか・・・

いつもなら瑞貴も止めるところだが、  
今回は面白がっているようだ。

「霸王？馬鹿め！」

あいつがやってのけたのは悪魔の消滅ではなく封印だ！  
さらには女神を連れて逃げた無法者だ！

その血を受け継ぐ者が瑞貴の婚約者などになること自体お門違い  
だろう」

「瑞貴のことはどうでもいいわよ！」

だけど、霸王を馬鹿にすることだけは許せない！」

スズナの目と空気が完全に変わった。

それにさすがの仙人も怯む。

一瞬メイリンが光臨したような・・・

「てんで話にならないの。」

こんなじゃじゃ馬が瑞貴に釣り合うのかの・・・」

それに瑞貴ははつきり答えた。

「こいつは俺の恩人でもあるんだ。  
なにがあっても嫁にする。それだけは覚えとけ」

スズナは何もいえなかった。

## 第十九話：お茶

自分が瑞貴の婚約者だといわれても何も言えなかった。  
いや、事実はいうことを封じられた。

世界で一番嫌いなこの男の魔力のせいで！！

「瑞貴！！　　ずいぶん勝手な魔法かけてくれたわね……！！」  
「言っただろ？　　おてんばやるなと」

瑞貴はしれつと答えてコーヒーに口をつける。

天界の城の庭園。多くの緑と花に囲まれ、

心地よくあたる日差しの中でお茶を楽しむ。

だが、その空間にスズナの怒気は立ち込めていたのだ。

「大体、婚約者って何考えてるのよ！」

もっともな問いに、もっともらしい答えを瑞貴は返した。

「……あの女たち、全てこの城のお妃候補だ。

そいつらからお前を守るにはこれしかないんだよ」

「全員瑞貴の？」

瑞貴が天界でもかなり高い身分だということは、

さっきの仙人の話でも予測がついた。

もしかしたらこの城の主かもしれないとも思ったが、  
どうもそれもしっくりこなかった。

瑞貴の性格のせいかもしれないが……

「それは違うな。そのことはおいおい話してやるよ」

瑞貴はそれ以上何も言わなかった。

しかし、さらにスズナは言う。

「それなら私も神兵にすればいいじゃない！」

「そうもいかない」

ヤンロンが否定する。

「女の嫉妬心はたとえ仲間といっても募るものだ。

特にお前はメイリンの子孫。

霸王を目指す瑞貴の側にいれば、嫌でも目を付けられる」

「それくらい平気よ！」

「そうでもないわよ」

こんどはセディが割り込む。

「彼女たちは全員スズナ以上の力を持つてるわ。

今襲われたりしたら、とても無事とは言えないの。

中には私以上に強い魔力を持つ者もいるのよ」

セディ以上に強いものなど考えたくもない。

確かにそれでは自分に分がないことは納得できる。

「そういう事だ。しばらくは大人しくしてろ。

それと俺の部屋に泊まってもらうから」

爆弾発言。しかし、それ以上の爆弾はスズナのほうだった。

「絶対嫌！！ あんたといてろくなことになる気がしないわ！  
セディのここにいく！ ダメならヤンロン泊めて！」

人生の中でこれほど嫌がったこともないだろう。

目に涙まで浮かべてセディを見つめる目は、

状況が分かっているセディの心を揺さぶるものだったが、

「・・・！！ お前な・・・！！ 人の話聞いてたのかよ・・・！！」

往生際の悪いことばかりいつてるんじゃないよ！」

効率の悪さと面倒なことが大嫌いな瑞貴は、

スズナを怒鳴りつけるが、

「わかってても嫌なの！！」

「おい、スズナ！」

スズナは全速力でその場から消えたのだった。

もちろん瑞貴もそれを追いかけて・・・

「おい、セディ」

「何？」

紅茶を飲みながら楽しそうにセディは答えると、

「スズナのスピードと魔力、

ここにきて異常な速度であがってる気がするんだが・・・」

ヤンロンのもつともな感想。

それはセディも感じていたこと。

「そうね」

それだけ答えて、セディはにっこり笑うのだった。

## 第二十話：追いかけてこの勝敗

「スズナあ!!」

「追い掛けてくるなあ!!」

かつてこの天界の城で、

ここまで激しい追い掛けっこをした者がいただろうか。

木に飛び移りながら、川を飛び越えながら、

時空間まで飛んで追い掛けるものなどいなかっただろう。

「おてんばもほどほどにしろと言っただろうが!」

「それでもあんたと同じ部屋で寝るのだけは嫌!

何されるかわからないわよ!」

「誰がやるか! 色気より食い気の癖に!」

「なんですって!!」

とは言いながらも、戦えば捕まる。

はじめは弱いと思っていたが、

どうも瑞貴がとんでもなく強いということが、

この数日間で痛いほど分かった。

いや、認めたくないが霸王になるといったあの時、

すでに気づいていたのかもしれない。

「仕方ない……召喚!」

「なっ!!」

突如スズナの目の前に大木が現れた!

止まることができない!

「きゃあああ!!」

「ごぉん!!という鈍い音がした。  
それは激突の音……」

「ようやく止まったか……」

まったく悪びれた表情もなく、  
さも当然の報いというかのように瑞貴は言う。  
スズナにいたっては痛みで声も出ない。

「冷やしてやるから大人しくついて来い……  
いや、歩ける状況でもないか」

笑い声が耳に障る！  
禍々しい殺気が満ち溢れている！  
しかし、動けない。

「さて、一気に時空間を飛んでいくから目だけ閉じてろよ」  
軽々とスズナをお姫様抱っこすると、  
瑞貴はその場から自分の部屋に飛んだのだった。

そして同時刻……

「ご馳走様でした」

「はい、お粗末さまでした」

お茶を飲み終えたヤンロンとセディは、

ようやく落ち着いたであろうあの二人の騒動を感じ取っていた。  
どう考えても瑞貴の圧勝であろう。

「さて、とりあえず私は長のところへ行ってくるけど、  
ヤンロンはどうするの？」

「そうだな・・・」

そこに一陣の風が現れた。

正体は天界の情報伝達人だ。  
仮面をつけ、その表情は分からない。  
だが、低い声で告げた

「団長、サラ様がお呼びです」

それはヤンロンのこと。  
ヤンロンは表情を引き締めると、

「分かった、すぐに行く」

そう答えたのであった・・・



## 第二十一話：竜王の血筋

お日様の匂いがする部屋。

高級でやわらかそうな大きなベッド。

飾り気のないシンプルな部屋。

なんとなく瑞貴らしい……

「いたた……」

額につけた大きなたんこぶはギャグではなく本物。

瑞貴は氷嚢袋を額に当ててやると、

「自業自得だ」

相変わらずである。

もうこの憎まれ口を何度聞いたことか……

だが、それでもスズナの短気さは変わらない。

「あんたが大木を召喚するからでしょ！」

だいたい、あんた一体どれだけ魔法を使えんのよ！」

「地界にあったものはほぼ全てだな。」

お前と違って学校では優等生だったしな」

瑞貴は笑いながら答えるが、

「私だって成績は学年一よ！」

これでも有名人だったんだから！」

「ああ、知ってるよ。おてんばの一年生。」

腹が減るたびにいろんな奴等にバトル挑んでたんだろ」

瑞貴は腹を抱えながら笑う。

しかし、あたっているので何もいえない。

「だが、悪かったな……」

お前の両親も友人も救えなくなっちまってさ」

初めて謝罪の言葉をきいた気がする。

その顔はなんとなく不器用。

しかし、それが瑞貴の本心だった気がした。

「……私の友達がドールにかかる前にあんたの話をしてくれた。

どこかの貴族じゃないかとかって。

だけど、私を感じた印象を言っただけ？」

スズナはまともに向き合った。

始めてあったあの時に感じた印象を伝えるため……

「竜王の血筋なんじゃないの？」

「……」

瑞貴は声が出ないほど驚いた。

それがまさに真実だったからだ。

「天界の中で尊敬されるものと言ったらそれしか考えられなかった」

「……お前勘よすぎだ……」

瑞貴はまいってしまった。

自分で伝えようと思っていたことは、  
とつくにばれていたことであつた。

そしてずっと立ち上がると、

「天界の竜王は俺の先祖だ。

俺の正式名は「敖 瑞貴」。

東海青竜王の末裔だよ」

それを聞いたスズナはしばらく止まると、

「ええ~~~~~!!」

そんなに偉い竜王の子孫だったの!？」

「自分で言っただろうが!」

「いや、普通の竜族かなと……」

「普通って何だよ!」

またもや始まるパニック。

額のたんこぶの痛みも忘れたほどだ。

「とにかくそういうことだ!

普通なら瑞貴様とぐらい呼ばせたいがお前は絶対無理!

だからせめておてんばくらい控えろといえばさらにやらかす!

俺の苦勞が少しはわかったか?」

「さあね。もともとそんなことくだわるほどいい性格でもないですよ?」

いたずらな笑顔でスズナは答える。

たしかに、瑞貴もこのままのほうが好きだ。

特別視しないスズナだからこそゆとりがもてるから……

「仕方ないやつはいるんだな……」

こつんと額のたんこぶをたたいてやると、  
スズナは再びもがきだすのだった・・・

## 第二十二話：女神の恋

天城の主は一人の青年の到着を心待ちにしていた。  
上級の女神が神兵に恋をすることなど、  
常識から考えればご法度もいいところ。  
それがたとえ神兵の団長であつてもだ。

「失礼しますサラ様。ヤンロンです」

低い心地よい声がサラの部屋に通り抜けた。  
心待ちにしていた相手の声だ。

「ああ、ご無事でしたか、ヤンロン様」

セディが西洋系美人なら、  
サラは和美人というところか。  
上等な着物を着た天城の主は、  
ヤンロンに微笑みかけた。  
しかし、ヤンロンはあくまでも主従関係を崩さない。

「勿体ないお言葉です」

ヤンロンは一礼した。  
そして片膝立ちになり頭を下げる。

「サラ様、お願いがございます」  
「分かっております。幻想の国を滅ぼした悪魔ですね。  
サタンに違いありません」

サラが呼んだ理由は主にそのことだった。

天城の女神という立場上、

神兵に命を下すのは当然のことだ。

「やはり・・・瑞貴でさえ動くのが精一杯だったようで・・・」  
「ええ。ですが、メイリンの血を引く少女に助けられたようですね」

すべて見通しているのもサラならではの。  
だからこそ彼女は悲しい表情を浮かべた。

「天界から抜け出すおつもりなのでしょう？」  
「・・・はい」

言い訳しても無駄なことはヤンロンはわかっていた。  
だからこそ正直に答える。

「止めても無駄ですね」  
「はい、すべては青竜王様のため。  
そして瑞貴を霸王にするためです。  
お仕えできなくなることをお許してください」

ヤンロンは深々と頭を下げた。

「私も・・・連れて行ってはくださいますか・・・」  
「・・・危険です」  
「ですが私は・・・!!」

それ以上ヤンロンは言わせなかった。  
サラの恋は認められるものではない。

「サラ様、私は瑞貴とセディ、  
そしてスズナ様を守らなければなりません。  
サラ様を守りきることは出来ません。お許しください」

心からの謝罪だった。

自分が生まれたときから仕えてきた主の一人なのだから……

「……分かりました。ですが、こちらもお好きにさせるわけには  
行きません。」

何より長はあなた方が闇界に向かうことをお望みではありません。  
全力で阻止させていただきます」

「……受けてたたせていただきます」

そしてヤンロンは部屋から去ると、  
サラは一筋の涙を流すのだった……

「私の片恋だったのですね……」

## 第二十二話：女神の恋（後書き）

お久しぶりです！

ようやく書けましたので、今後ともよろしく願います



## 第二十三話：面影

ヤンロンがサラのもとを訪れていた頃、  
セディは長に呼び出されていた。

「地界でも騒ぎは絶えなかったようじゃの」

少しだけ皮肉を込めて長は言うが、  
セディには全く通用しない。

怒るところか、ニツコリ笑って返された。

「あら、瑞貴は楽しそうでしたよ。」

女の子と喧嘩なんかしたこともなかったのに、  
本当スズナちゃんとは楽しく・・・」

「認めん！」

長は一喝した。

「瑞貴はやがて天界の王になる身分じゃぞ！」

おまえほどの女神を教育係に付けたのも全ては天界のため！

それをあんな地界の小娘にやれるもんか！」

「だけどメイリンの血を継いでますよ」

セディは微笑んだ。

「それに、瑞貴は覇王を目指してる。」

あの子が生まれたときから予感はいらっしゃったのでしょうか？  
」

「長は分かっていた。」

たった二歳だった瑞貴は、  
すでに霸王になると騒いでいた。  
地界の王の称号など、

この天界でたいした価値などないのに……

「だが、認めるわけにはいかん。  
セディ、忠告はしておく。

もし、お前達が本気で天界から抜けるといふなら、  
この天の国すべての兵力をもってお前達を止める。  
瑞貴の時空魔法で逃げ切れと思うな」

空気にまるで電気が走ったかのようにセディは感じた。  
しかし、それに動揺することなく、  
セディは落ち着いて答えた。

「肝に命じておきます、長。  
それでは瑞貴のもとに戻ります。  
スズナ様をメイリン様のように磨きあげたいので  
似てることだけは認めてくださいね」

セディは瞬身でその場から消えたのだった。

「……認めてはおる。

だが、霸王だったあいつの方にそっくりじゃ……」

メイリンを天界から連れて逃げた男。  
かつての霸王だった男を長は思い返すのだった……

## 第二十三話：面影（後書き）

更新遅くなりました！ ですが頑張りますので、これからもよろしくお願いします

## 第二十四話：休息と作戦

「おいしい〜！！ しあわせ〜！！」

「お前あんまり食うと太るぞ。」

俺は体型にはうるさいからな」

瑞貴の部屋に運ばれて来た夕食を、

スズナは心から堪能していた。

特に天界名物

「桃まん」は絶品だった。

「別にいいもん！ あんた好みになる必要ないし」

「だが、天界の食い物は太りやすいものが多いぜ」

それを聞いてスズナは手をとめた。

確かに、カロリーが高そうなものが溢れている気がする。

「瑞貴、しばらく天界に戻れないんだから、

スズナちゃんに美味しいもの堪能させてあげなさい」

「セディ！」

スズナは嬉しい声をあげる。

女神の洋装をしたセディが、

瑞貴の部屋に入って来た。

「遅かったな。爺さんに捕まってたのか？」

「ええ。私たちの思考は相変わらずお見通しだったわ」

セディは笑った。

この天界から抜け出すことはとくにばれているらしい。  
しかし、どこからその落ち着きが来るのか、  
スズナには理解不能だった。

「とりあえず、決行は夜中だ。」

サラ様でも爺でも、俺が天界から抜け出したら追って来れないかな

「どうして？」

不思議な表情を浮かべてスズナは尋ねる。

「簡単なことだ。」

天界から抜け出すことは掟破りだからな

ヤンロンは答えながら部屋に入ってきた。

「ちょっと待って。」

天界から出ちゃいけないなら、  
皆は平気だったの？」

スズナの問いに瑞貴はあっさり答えた。

「俺達は親父から許可が下りてたからな。  
しばらく地界で遊んでくるってさ」

「結構いい加減な理由ね……」

もっと重大な理由で地界に来たのかと思えば、  
どうやら遊びでもあったようだ。

「そついうことだからよ、」

お前は飯食って少し寝てろ。

俺達は少し準備することがあるからさ」

「準備？」

「ああ、閻界までのルートを確保する」

そう告げて三人はその場から消えたのだった。

## 第二十四話：休息と作戦（後書き）

お待たせしました こっちもようやく更新です。 「THE TEA M!」も完結しましたので、見てくださいね

## 第二十五話：守りたいもの

瑞貴という一つ年上の男は、  
青龍王の血を引く身分なくせして、  
地界の霸王の称号が欲しいらしい。  
だが、どうして霸王になりたいのだろう？

「お日様の匂い……」

瑞貴自身は嫌いでも、  
瑞貴のベッドは心地良すぎた。  
さすがは王子様だけはある。

「だけど、皆どこに行ったのかしら？」

闇界までのルートを作りに行くと言って消えた三人は、  
一時間近く経つのに戻ってこなかった。  
名前からしてろくでもない場所に違いなだろうが、  
少しだけ不安が募る。

「失礼します、瑞貴様」

美しい声が部屋の中に入ってくる。

「誰かしら……」

開けた瞬間、スズナの前髪を剣先が掠めた！  
そして息もつかぬ間に女剣士達がスズナを狙ってくる！



「スズナ・メイリン！ 覚悟！！」  
「いやっ！」

持ち前の反射神経で、  
スズナはギリギリのところでもかわしきれた。  
スズナを襲ったのは、  
間違いなく瑞貴の妃候補や侍女達。

「やはりガセネタだったのね。  
瑞貴様があなたのような地界の者など相手にするのですか！」

「それはこっちの台詞よ！」と、  
スズナは突っ掛かってやりたいところだったが、  
女神達相手に勝てる気はしない。  
何より、これから天界を抜け出す前に、  
大騒動にするわけにもいかなかった。  
スズナは凜とした態度で言う。

「瑞貴は私に惚れてる。  
私も瑞貴が好き。  
それだけじゃダメなの？」

自分でもよく言えたものだと感じた。  
しかし、瑞貴が霸王を目指したいといった。  
それだけは守りたかったのだ。

「黙りなさい！ たかが地界人が」  
「私はメイリンの生まれ変わりよ！  
霸王は絶対を守る！」

強い魔力が女神達を威圧した・・・

## 第二十五話：守りたいもの（後書き）

長い間放置してすみません！「THE TEAM！」がつい書きた  
くなってしまうて・・・これからお願いします

## 第二十六話：開始

どれほど大きな困難でも、

幻想の国が滅びたときから、

スズナはひそかに誓っていた。

瑞貴が霸王になるなら、自分が守ろうと……

「お前達、俺の部屋の前で何をしている」

「瑞貴様！」

腰を抜かしていた女神達の前に、

この部屋の主は帰って来たのである。

「スズナが倒れているようだが……

なるほど、こいつの魔力と覇気に威圧されたか」

哀れな女神達を瑞貴は嘲笑う。

「瑞貴様！ その女は危険過ぎます！

メイリンの血を引いているならなおさら！」

侍女の声が掻き消された。

今度は瑞貴が威圧したのだ。

「メイリンの血を引いているからこそ、

俺はこいつがいいんだ。

霸王の名を出してくだらないとしか思わない女どもに、俺が興味を持つわけもないだろう」

ほぼ自分達は切り捨てられたと同然の発言だった。  
顔面蒼白のものまで出る始末だ。

「瑞貴様、すみません！」

侍女の一人がスズナに襲い掛かろうとしたが、

「血迷ったことをするな！」

「隊長！」

侍女を止めたのはヤンロンだった。

「瑞貴」

「分かってる。リン、お前を処罰する。  
ついて来い」

リンという名の侍女はその場に崩れ落ち、  
隊長であるヤンロンが抱えると、  
瑞貴ともども、その場から消えたのだった。

「何の騒ぎです？」

「サラ様……」

サラが騒ぎを聞き付け、  
その場に瞬間移動で飛んで来た。

「瑞貴様が……」

声にならない声でも、サラにはこの場の現状で理解できた。

「……動き出したんですね」

そして幕は開かれる。

「ナイスだったでしょ、ヤンロン隊長」

リンは一気にセディへと姿を変える。

「やり過ぎだ。バレたらどうする」

ヤンロンは呆れ返る。

「ということだ。そろそろ声出してもいいぜ、スズナ」

ニヤリと笑った瑞貴に、

スズナは一気に覚醒して殴り掛かる！

「瑞貴！！ あんたはまた私に……！！！！」

スズナが気を失ってたのはほんの数分。

瑞貴が現れた時には意識を取り戻していたが、  
またもや瑞貴が彼女の自由を奪ったのである。  
その間、言いたい放題というより、  
やりたい放題だったと言うわけだ。

「やっぱりもう少しウエスト絞めろ。」

重過ぎるより少し軽いほうが楽だろ」

「ふざけるなあ……」

この叫びとともに、天界は動き出した。

## 第二十七話：脱走開始

「さて、闇界への道は造った訳だが、スズナ、お前体術以外に取り柄はあるか？」

瑞貴の厭味つたらしい言い方は、もはや止められるものじゃないとスズナは学習した。

「時空と治療、召喚魔法以外ならやれるわよ！どうせメイリンとは逆ですよ！」

「なんだ、思ってたより出来るのか」

褒めてるのかそうじゃないかは分からないが、少なくともけなしてはない。

「いいか、天界から闇界へは俺の瞬間移動で飛ぶ。その後にお前の光の魔力をフルに使って二つの世界の狭間を破る！勝負はたった一瞬だ」

こんな時だけは真剣になる。

未来の霸王は威厳だけは一人前だ。

もともと天界の王子様なのだから仕方ないが……

「あの時と同じなんでしょ。」

今度は倒れたらほっとくからね！」

「心配するな。お前が足さえ引つ張らなければ問題ないからよ」

スズナに特大の青筋が浮かぶ。

しかし、今回はセディとヤンロンがいる。



必ずサポートしてくれるはずだ。

「じゃ、いくぞ！」

「させん！」

そこに現れたのは仙人と女神、  
そしてヤンロンが鍛え上げた神兵団。

「瑞貴、いや、青龍太子よ、

お前がやろうとしていることが何を意味するか分かっておるのか  
？」

瑞貴の呼び方が敬称へと変わる。

「ヤンロン隊長、あなたの神兵団長の任務、  
この場において剥奪します！」

セディがさつき化けていた神兵、  
リンがヤンロンを睨み付ける。

「セディ様、光の女神ともあろうあなた様が、  
どうしてこのようなことにお力を貸すのです」

サラが悲しそうな目をしてセディに言うと、  
瑞貴は微笑を浮かべて答えた。

「霸王は俺の夢だからだ。  
そしてメイリンの子孫に会えた。  
これ以上の理由はない」

「うつ!!」

力ある者以外、全てが瑞貴の覇気に威圧された。  
瑞貴が支えてくれなければ、  
スズナもその場に崩れるほどの覇気だ。

「・・・そうか。」

だったら話は簡単じゃ。

まずはスズナ・メイリンを葬り去るだけじゃ」  
「飛ぶぞ!」

四人は一瞬のうちにその場から消えるが、

「サラ、リン」

「はい! 必ず!!」

二人の姿もその場から消えたのだった。

## 第二十七話：脱走開始（後書き）

久しぶりに更新しました 遅くなっ  
てごめんなさい！

## 第二十八話：リン

瑞貴の瞬間移動は闇界へ続く道まで飛ぶことが出来た。そしてその道は、灰色の道ではあったが、冒険の匂いがしていた。

少なくとも、スズナはそれを感じていた。

「モテる男は辛いね、ヤンロン」

走りながらセディはヤンロンをからかう。

「仕方ないさ、ヤンロンにはいい女が寄ってくるからさ」

「あんたがそれを言うと言説力ないわよ」

瑞貴の発言にスズナはツツコム。

「だけど、サラ様とリンちゃん、どっちを選ぶの？」

セディの問いにヤンロンは答えた。

「お前がサラ様を止める。」

リンは俺が止める」

それだけ言つて二人は消えた。

「えっ！？ 二人ともどこに行くの？」

闇界の入口まで後少しのところで二人は戻ったのだ。

「追っ手を止めにだよ。」

あの二人は後から必ず来るから俺達は先に進むぞ」

瑞貴はスズナを抱え、さらにスピードを上げた。

「隊長！」

リンは目の前に現れたヤンロンに驚く。

彼女が恋い焦がれ、憧れ続けた男がヤンロンだった。

「リン、これからはお前が神兵団長の任につき、サラ様をお守りしろ。」

それを受け入れすぐにサラ様と引き返せ」

「嫌です！ 隊長をこのまま閻界へ行かせはしません！  
どうしてもとおっしゃるのなら、

力ずくでもあなたを止めてみせます！」

リンは赤い柄をした細剣を抜いた。

それはヤンロンが彼女に与えたものだ。

「リン、お前には分かっているはずだ。」

なぜ俺が法を破ってまで瑞貴に手を貸すのか」

「……分かっています。」

私だっで行けることなら行きたい。

ですが、青龍王様がそれを許すはありません。  
だから例え刺し違えてもあなたを止めます！」

リンは本気だった。

その視線が痛い。

自分が初めて剣術を教えた少女。

数年前より成長していても、

心根は全く変わってはいないのだから。

「いいだろう、最後の稽古を付けてやる」

ヤンロンは二本の剣を静かに抜いた。

## 第二十九話：いい子

「ヤンロン隊長、いえ、ヤンロン兄さん！　いきますー!!」

かつて自分の妹弟子であつたリンは、  
渾身の力を込めてヤンロンに斬りかかる！

「・・・くっ!!」

力は圧倒的にヤンロンの方が上。  
自分に剣術を覚えてくれただけあつて、  
動きも全て読まれている。

「スピードが足りない。

もっと早く斬り込め、重心を下げる、相手の動きを感じ取れ!!」

その声は変わらない。

その視線も変わらない。

自分が恋い焦がれたヤンロンだ。

しかし、その思いは一生通じることはない。

ヤンロンが誰を見ていたかなど妹弟子なら分かる。

「どうして・・・!!」

剣を交えながらリンの声は震える。

「どうして・・・!!」

そして向けた表情は涙。

「どうして私を置いていくの！  
ヤンロン兄さん！」

そしてリンの手から剣は弾かれる。  
その問いにヤンロンは静かに答えた。

「……リン、お前の気持ちは分かる。  
お前だって闇界に行きたいのも分かっている。  
瑞貴とセディとお前は共に過ごした仲だ。正直俺も迷った」

ヤンロンは鞘に剣をしまい込む。

「だが、かわいい妹を危険に遭わせたい兄はいない。  
お前はここでサラ様を守っていてもらいたい。  
師匠の大事な忘れ形見であるサラ様を」

だが、リンは首を横に振った。

「いや、私も一緒に！」

そして頭に置かれた手は優しく彼女を撫でる。

「いい子だから待っていてくれ。  
兄さんは瑞貴様を守らなくてはならないんだ。  
そして兄さんの恋人を探さなくてはならないんだ。  
だから待っていてくれ」

そしてヤンロンはその場から消えた。



「……分かってるよ。」

「ただ、リンはヤンロン兄さんが好きなんだよ……」

リンはそれ以上追い掛けられなかった。

一方、セディの方は……

「サラ様、相手が私になってしまったこと、深くお詫び申し上げます」

セディは深く頭を下げた。

「いいえ、セディ様。」

ヤンロンは妹思いなんです。

私よりリンを選ぶことは分かっておりました。

しかし、あなたがピンチになれば駆け付けましょう」

女神同士の対決が始まろうとしていた。

## 第二十九話：いい子（後書き）

久しぶりです！放置していてすみませんでした（笑）

### 第三十話：少しの後悔

瑞貴とヤンロン、そしてリンはセディにとって大切な弟妹だった。サラの父から戦闘のスキルを学び、今や天界においてその武勇を知らないものは少ない。しかし、その師匠ですら閻界で行方知れずとなり、生死すら定かではなくなったのである。

「天の女神様が物騒な力を放つのね」

「セディ様ほどではありません。」

ただ、ここで私も負けるわけにはいかないのです！」

強力な空気圧がセディに襲い掛かるが、それを難無くかわしていく。

力の差は歴然だった。

セディに敵う女神など天界には存在しない。だからこそ誰もが彼女に頭を垂れるのだ。

「サラ様、私もそろそろ瑞貴に追い付きたいのです。なのでメッセージだけ残します。」

ヤンロンはあの方を探しに閻界へ入るつもりです。だからヤンロンのことは諦めてください」

分かっていた現実を他人から聞くことも残酷である。しかし、それが事実だ。

「……セディ様も残酷な方ね。だけど諦めることは簡単ではありません。」

私はそれほどまでにヤンロンを欲しているんです。  
だから、何としてでもあなたを!!」

腹部に走る重い痛み。

サラはそれを受け入れなければならなくなった。  
自分が倒されたという事実を・・・

「大丈夫です。」

ヤンロンはあなたに使えたことを誇りにしていますから。  
師匠の大切な忘れ形見なんですから・・・」

「・・・そうですか」

サラはその場に崩れ落ちた。  
そして当事者は現れる。

「モテる男は辛いわね」

「お前ほどではないさ」

ヤンロンは軽く受け流す。

しかし、多少の後悔は残っている表情を浮かべて・・・

「リンだけは連れていきたかった？」

セディは少しだけわらって尋ねると、

「ああ、可愛い妹をそばに置いておきたいのが兄だが、  
強く育てるのも兄としての役目だ」

「・・・それは姉としても同感だわ。」

とりあえず、早く瑞貴達に追い付きましょう。  
最悪のストッパーに捕まってるみたいだしね」

「ああ、自らお出ましになるとは予想外だったかな」

瑞貴達の前に、恐ろしい男が立っていたのである・・・

### 第三十一話：東海青竜王

神々しい男は目の前に立つ。

自分の父、東海青竜王。

そしてその男を前にして、自分にすら興味を持たなかったスズナ・メイリンは、

少しだけ頬を紅に染めている。

「うわあ、美形って本当にいたんだ」

スズナは驚きの声をあげる。

「うわあ、ミハーって本当にいたんだ、しかも馬鹿力女だが」

「何ですって!!」

スズナは我にかえる。

そしてどこかおもしろくなさそうな表情をした瑞貴は、青竜王に文句をぶつける。

「お久しぶりですね、父上。」

だが、東海青竜王ともあるうお方がわざわざ息子の見送りですか」  
「……いや、お前達の闇界行きを阻止しに来た」

声までが神々しかった。

物静かな風貌とその覇気は、

初めて瑞貴と出会ったときとは違うが、

やはり親子なのだと思わせる空気ではあった。

自分を見抜かれている視線は本当にそっくりで……

「霸王を目指すことに反対はしない。

お前がそう決めたのならばそうすればいい。

だが、ヤンロンとセディだけに止まらず、

玉帝の血を引くメイリンの子孫を危険に曝すことまで許すわけにはいかない。

それが天界の意志だ。お前がそれを知らないわけもないだろう？」

スズナは混乱した。

メイリンは天界から霸王に連れていかれた下級の女神だと思っていた。

霸王が伝説になったから地界の女神とされたのだと思った。

だからこそ、高貴な女神達が自分の命を狙ったのだと思っていたのだ。

それが竜王の上をいく位を与えられた女神などと言われても信じられる訳がない。

「……だったら面白いじゃないか。

俺は霸王と同じことをやろうってわけだ」

「そのとおりだ。だが、事態はお前が思ってるほど生易しくはない。魔法の国がドール化したということは闇界の力がそれほどまでに強力になったということだ。

戦争が再び起こるということだ」

「戦争……」

友人達を、魔法の国を滅ぼした者達と戦うことなど嫌でも分かる。しかし、瑞貴はニツと笑って答えた。

「だったらなおさらだ。

俺達が闇界に乗り込んで奴らを倒す。

もう決めたことだしな」

「私を止められると思うか？」

「師匠よりは弱いと思うがね」

二人の闘気がぶつかる。



### 第三十二話：そして始まる伝説

親子が争うことは実に悲しいこと。

スズナの両親は彼女を魔法の国の王女として扱わず、捨てた・・・

「瑞貴、やはりその程度か」

青竜王は自分の足元で膝を付く瑞貴を見下しながら言う。  
力の差は最初から明白だった。

どうあがこうとも、竜族の主に敵うはずなどない。  
しかし、わがままと頑固さは瑞貴の専売特許なのか引くことをしない。

「まだやれるさ。風よ・・・」

「やめておけ。お前がどれだけ私に刃向かおうとも、  
絶対的な力の差は埋めることは出来ない」

重力が瑞貴に襲い掛かり、また動きを封じられる。  
致命傷を与えないだけ親心なんだろう。

「瑞貴！ やっぱりダメだよ！ もうそれ以上戦わないで！」

「うるさい！ お前は引つ込んでたらいいいんだよ！」

メイリンみたいな魔法使いになりたいんだろ、スズナ」

傷だらけの顔が綺麗だなんて初めて思った。

自分の夢を認めてくれる人だからそう思ったのか、  
瑞貴が元から美形の部類にはいるからなのかは分からないが。

「確かになりたいけど・・・あんたが死んだら意味がないでしょ！  
私は霸王のために強い魔法使いになりたいの！

こんな夢みたいない願いに付き合ってくれる奴なんか、  
あんたみたいなバカしかないのよ！」

スズナは青竜王に突撃する！

もはやスズナご自慢のど根性に頼るしかなかった。

「どきなさい！ 青竜王！」

「愚かな・・・」

青竜王はスズナを重力で地に伏せさせようとしたが、

「なめんじゃないわよ！」

怪力女の底力は半端じゃなかった。

地に伏せていた瑞貴を持ち上げ、

青竜王を抜き、天界と閻界の境目に拳を立てる！

「壊れなさい！」

「させん！！！」

二人の力が見事にぶつかり、それが弾けて二人の姿は消える。

「瑞貴！ スズナ！」

二人の姿が消えたと同時に、ヤンロンとセディはたどり着いた。

「青竜王様！ 瑞貴とスズナは！」

ヤンロンは慌てて尋ねると、

「進むべき道に落ちた。」

そして、お前達もその世界へ行くがいい」

その言葉だけ残して、青竜王は消えたのだった。

そして物語は、伝説の幕開けとなる。

### 第三十三話：不敵な医者

一体どこの世界に叩き落とされたのか分からない。

ただ、一度繋いだ手を離してしまったことだけが事実だった・・・

パチパチと薪の燃える音がする。

二十代真ん中ぐらいであろう青年は医療道具を洗い、鞆の中にしまいこむ。

目つきは少々悪い気がするが、微笑を浮かべたその顔は悪人のようでも美形の部類にはいるのだろつ。

「んんっ、・・・ここは」

「ようやく気付いたか」

まだ声が遠い。瞼が重いし身体も重い。

「いい加減に起きろ。子供のお守り何ぞ俺の趣味じゃない」

「瑞貴・・・じゃない！」

スズナは覚醒した！

「ねえ！ 私と同じぐらいの男の子見なかった！」

スズナは掴みかかった！

さっきまでそばにいたはずの少年は消えていたのである。

「とりあえず落ち着け。」

俺は川の中で倒れていたあんたを担いで来て治療した医者だ。まずは治療代を請求するところからだ」

呆氣にとられたというのはこういう状態をさす。

スズナは何とも言えない状況を理解し、込み上げてくる怒りを抑えるしかなかった。

「とりあえず、お前はどこの誰でどうして空から降って来た？」

これから聞くこと全てをまとめられた気がする。

しかし、スズナは律義に答えた。

「私はスズナ。魔法の国出身の十六歳。」

空から降って来たのは天界の青竜王と闘っていたからよ！天界なんて言っただけで信じたりしないでしょうけどね」

ここが天界じゃないことだけは確か。

そして天界と聞いて信じる人間もおそらく少ないだろう。

「……なるほど、普通なら妄想癖と診断してやりたいところだが、  
天界の服を着ていて疑うわけにはいかんな」

「へっ？ 信じるの？」

スズナは信じてくれたことに驚く。

「ああ、スズナ・メイリン王女様ならたんまり治療代をいただけそうだしな」

やっぱり信じてはいなかった。  
しかし、スズナは気付く。

「ちょっと待って！ 私の本名を何で知ってるの！？」

名乗っていないフルネームを、青年は見事に言い当てたのだ。

「分かるさ。あんたの魔力、その辺の奴よりよっぽど強力だからな」

さらりと言つてのける。

そしてようやく気付いたことがある。

この目の前にいる医者は自分以上、いや、瑞貴達と同等の魔力を  
持っていることに。

「あんた何者なの？」

「……答えは後だ」

次の瞬間、家が吹き飛ぶ！

「おいでなすつたか、闇界の化け物どもが」

青年は不敵に笑った。

### 第三十四話：ひょっこ

目の前に現れた数十の牛鬼達は、  
いかにも自分を助けてくれた医者を狙っていた。  
しかし、その当事者の落ち着き様は何なのか……

「闇界の魔物ってやつ？」

「ああ、見た目から伝わってくるだろう？」

そして、魔法の国にいたらドールの兵士達も見てるな。  
こいつらもドール化された魔物だ」

「何ですって！」

つい先日のことを思い出す。

魔法の国に起こったあの悲劇。

友人達が操り人形の様にされ、いくら攻撃しても全く倒れず、  
危うく殺されそうになったことを……

「なに、慌てる必要はない。

ドール化されてるといえども、しょせんはただの雑魚。俺の敵じゃない」

そしてすつとのばされた人差し指。

男にしてはやけに綺麗だと感心する。

「何やってるの」

スズナは予想できそうな答えを聞くことになりそうだが、なぜか  
尋ねてみる。

「何ってこいつらは雑魚だと言つたろ。」

指一本で仕留める」

「バカでしょあんた！ 殺されるわよ！」

間髪ない暴言に少しばかり医者是不機嫌になったが、十六の娘の言うことなど気にはしないようだ。

「殺されはしないさ。それとよく頭に叩き込んで。」

ドール化されたものの止め方は最低三つある。

一つは術者の息の根を止めること。

二つ目はドール化されたものを完全に消滅させること。そして三つ目が今からやることだ」

医者は一瞬のうちに牛鬼の後ろに回り込み指一本で突くと、牛鬼はその場に崩れ落ちた。

「えっ？ 何したの？」

自分があれば蹴つても殴つてもどうにもならなかったドールが、簡単に止まってしまったのである。

「簡単なことだ。己の魔力を指先に集中、

そして相手の魔力の流れを乱してやるだけだ」

簡単そうに言うてはいるが、長時間出来ることではない。

おそらく瑞貴が魔法の国から脱出する時に疲れきっていたのも、この繰り返しがあつたからなのだろう。

「だが、こいつはお前のようなひよっこ魔法使いがやることだ」



「ひよっこですって！」

スズナはかっとなったが、次の瞬間に一気に冷めることになる。

「ああ、この程度の雑魚ならこの方法が一番手っ取り早い」

「またも神業だった。」

医者が放つ覇気が牛鬼達を気絶させたのである。

「本能に恐怖を与えて気絶させる力、

それさえ出来れば指すら使わなくてもいい。

理解できたか、スズナ・メイリン」

医者の強さは人間ではなかった。

### 第三十五話：魔導師の血

牛鬼達を一瞬で倒した男の正体は単なる医者、とは思えないのだが……

「さて、今日の晩飯は牛丼だな」

「ええっ！ こいつら食べられるの！」

スズナは目をキラキラさせて尋ねるが、

「食ってもいいがまずいぞ、牛鬼の肉は」

「あるの？ 食べたこと」

「昔な」

昔というほど歳を食ってるようには見えない。

スズナはようやく普通の質問を投げ掛ける。

「ねえ、あんたの名前って何？」

「ああ、そういえば言ってなかったな。

俺はカイト・グランド。医者だ」

さつと答えたその名にスズナはムンクの叫びをあげる。

「か、か、カイトって！

まさかあんた医術大国・グランドの魔導師！？」

スズナはようやく全てを理解したのである。

グランドと言えば、かつて霸王の仲間だったものの血筋に当たる。

しかもメイリンと並ぶ超高等魔法使いの一人だ。

「へえ、やはりメイリンの血筋か。  
この恰好でばれたのは初めてだ」

面白さを含んだ笑いをカイトは浮かべた。

「だが、ただいま家出中でね」  
「どうして？」

スズナはキョトンとした表情を浮かべる。

「齡二十四にもなれば何かとうるさいからな。  
嫁にする女は昔から決めてるからよ、  
俺はその子が大人になるまで待つてる」

ロリコンとツッコミでも入れてやりたいが、本人は本気らしい。

「ふーん、一体どんな子なのかしら」  
「見たいか？」  
「遠慮しとく」

どう考えても自分と同じぐらいの女の子だろう、  
何よりロリコン医者 of 惚気は性質が悪そうだ。

「とりあえず、俺は会わなければならぬ奴がいるから旅路を急ぐが、

お前は どうする？ 瑞貴って奴を探すのか？」

スズナは考えた。瑞貴を探すことは優先事項だが、

ドール化されたものを一撃で倒すカイトのそばにいたほうが命の危険性は減る。

何より、瑞貴にはセディやヤンロンが傍にいと信じられる。

「いえ、しばらくはあんたに付いていく。  
まだ私は死ぬわけにはいかないから」

真つすぐな目がカイトを捕らえた。

「そうか、たが進路は俺が決めるが」  
「いいわよ、どこに行くの？」

カイトはすつと指を伸ばす。

その方向には険しい山、今にも魔物が飛び出しそうな邪気に包まれている。

「あの山の魔導師を消し去りに行く」

### 第三十六話：霞む

ファンタジーの世界というものは何でもありだと聞く。

しかし、ものには限度というものを考えてほしい。特に隣の医者には……

「あの山、何かの本で見た事あるような」

「へえ、お姫様も少しは勉強してるか」

「大分してるわよ！ これでも学年トップの成績だったのよ」

事実であるが、何故かいつもスズナはお転婆のイメージしかない。しかし、それを軽く受け流す周りもスズナの実力を知れば認めはするが……

「そうか。だが、もう少し女らしさを出しても悪くはない。

俺の婚約者は貴族でもないが、掃除、洗濯、炊事は完璧だ。

早く迎えに行きたいところだが、犯罪に手を染めたくはない」

「ロリコン医者が！ 私だってちゃんとやるときはやってたわよ！  
だけど、出来る兄と姉をもったら妹は霞むわ」

スズナは少しふさぎ込む。

おそらく、二人の兄妹もドール化してしまったのだろうが……

「霞むねえ。だが、お前以上に存在感のある女も珍しいと思うがな。  
瑞貴と言ったか、そいつがお前にとってどんな存在かは知らないが、

少なくともお前がいて心底暗くなる奴はいないだろうよ」

軽くカイトは言つてのけた。

しかし、褒められてるようなそうでないような感じに、スズナは何と返していいのかが分からない。

「お前は今より少しだけ女らしくなればいいだろう。

メイリンだって最初から立派な女神でもなかったはずだ」

「玉帝の血筋を引いてる女神様なら最初から出来も良さそうだけだね」

「仕方ないさ。お前は霸王の血も引いてるんだから」

間髪入れずにカイトは答えた。

しかし、ふとスズナは尋ねる。

「ねえ、私達の国では霸王は英雄だったけど、そっちはどうなの？」

天界で聞いた霸王は格下の地界人としか取られていなかった。

メイリンですら玉帝の血筋という事実を隠されていた。

ならばかつて仲間であつた者なら、

また別のとらえかたもされているのではないかと考えたのだ。

「俺の国ではメイリンも霸王も大歓迎されている。

大体の国がそうだろう。地界の人間は霸王達が戦ったから生きてるんだ。

それを誇つてやるのも子孫の勤めだ。

だからお前は自分が霞むなんて考えるな。

瑞貴という奴を霸王にしてやりたいんだろう？」

性格最悪なくせして前をしつかり見ていた瑞貴。

だけどスズナは心から思った。

「ええ、瑞貴が霸王になるなら、私はメイリンのように強い魔法使いになる」

スズナは本気でそう答えた。

### 第三十六話・霞む（後書き）

また放置してごめんなさい！  
これから頑張ります！



### 第三十七話：具体例

「カイト！」

「やれやれ」

襲い掛かってくる化物達に余裕で勝つ男は、スズナのお守りに労力を費やしていた。

いや、労力とも言えない力だ。

「全く、少しは手間をかけさせない術を身につけられないのか？俺はこの山に住む奴を始末しに行きたいんだが」

呆れながらカイトは言う、やはりスズナは食ってかかる。

「仕方ないでしょ！ あんたの言うドール化の解除って凄く難しいのよ！」

指先に瞬時に魔力を集中なんてコツぐらい教えなさいよ！」

魔力のコントロールが苦手ではない。

ただ、指先に集中が難しいのだ。

「コツか。お前、体術は得意か？」

「もちろん！ 喧嘩は好きよ」

あの魔法学園にいた時を思い出す。

毎日猛者達を相手に闘っていた日々を……

「だったら話は早い。お前は拳に魔力を集中に切り換える。体力と根性だけは普通の魔法使い以上だ。」

後はなんとかなるだろう」

いい加減さよこの憎まれ口は瑞貴といい勝負になりそうだとスズナは思った。

だいたい、さっきは自分を半分けなして慰めてくれた優しさはどこに行ったんだろう。

「カイト、あんた絶対性格歪んでるわ。

年下に好かれる性格じゃない」

「世の中の女は性格と容姿、さらには名誉も含め総合的結果で男を選ぶように出来ている。

若い女なら特にその傾向が強いと思うが」

間違いなくカイトの言ってることは一般的なことなんだろう。

スズナ自身、霸王じゃなければ嫌だと思ってるぐらいなのだから。

「納得したならさっさとドール化の解除を身につける。

ここのボスは閻界の住人でな、最近地界で悪さをする愚か者だ。

お前がメイリンの子孫だと分かれば間違いなく狙われる」

「言わなきゃ問題ないじゃない」

もつともな意見をスズナは言うが、カイトは大きな溜息をついた。

「その天界の服、魔力を帯びてる時点で奴のカンに障る。

次にそのエメラルドの目。

魔法大国・幻想の国の生き残りと象徴づけるには持ってこい。

最後に一つ、お前の血の匂いでメイリンの子孫だと奴らはわかる。だから確実に狙われる。

他にもいろいろあるが言ってほしいか？」

見事にカイトは具体例を挙げて説明した。

「……分かったわよ。

だけど、カイトも大丈夫なの？ グランドの血を引いているじゃない」

メイリンと同等の魔法使いをほっておくわけもない。  
しかし、やはり自信家は自信たっぷりに答えた。

「ああ、俺はまず負けないさ」

その意味をすぐに知ることになる。

### 第三十八話：魔導師の戦い方

カイト・グランドが強いと分かっていた。

その魔力もヤンロンやセディより上だとも直感的に感じ取っていた。

そして、闇界の住人が恐ろしく強く、自分達があのまま闇界へ入っていたら、

間違いなく殺されていたのだと思い知ることになる。

「カイト、息苦しくない？」

「だろうな。標高三千メートルはあるんだ。息苦しくて当然」

相変わらず息一つもきらしてない。

さすがに少し冷えるのかマントを羽織る。

「確かにそうだけど、空気も悪くない？」

「当たり前だろう？ ここにいるのは闇界の住人だ。

俺を弱らせて戦いたいんだろう。

無駄な事だと分かればいいものを」

またも不適な笑みを浮かべる。

この医者は一回ぐらい痛い目にあった方がいいに違いない。

スズナは心の底から思った。

「さて、そろそろ出て来るだろうな。

ここの忠臣あたりがな」

「その通りです」

スズナは空間を裂いて現れた女の攻撃を間一髪で避けた。

「意外だ、避けた」

「悠長なこと言ってる場合じゃないでしょ！」

少しぐらい助けるつもりはないのかとつつこんでやりたい。  
しかし、第二撃目がスズナを狙って来た！

「光の壁！」

「弱い」

カイトは瞬時にスズナの前に立ち、魔法弾を素手で弾いた。

「全く、お前はそれだけの力を持っている癖してコントロールがな  
っちゃいない。」

もっと底からメイリンの力を引き出せ。

幻想の国に張られた結界を破ったんだろう？」

あくまでもカイトは余裕だった。

それだけの力は語るまでもない。

「スズナ、魔導師の戦い方をしつかりと目に焼き付けておけ。  
こんな雑魚相手にいろはを使ってやるから感謝しろよ」

嫌味なやつとはまさにこのこと。  
だが、目を奪われる。

「まずはドール化の解除と同じ魔力コントロールからだ」  
「この楊貴をなめるな！ カイト！！」

楊貴はカイトに突っ込んでいくが、カイトは高く飛び上がる。

「舞空術もコントロール一つで身体能力そのものを強化できる。もちろん破壊力もだ。

そして次が召喚だ」

「なっ！」

いつの間に召喚したのか、茨の蔓が楊貴に巻き付く。

「召喚によって相手を困惑させることも可能。そして最後に」  
「うっ！！」

楊貴は泡を吹いて意識を失った。

「絶対的な支配力、覇気の強化。  
魔導師たるもの、霸王以外に屈するわけにはいかない。  
分かったか？ スズナ」

「・・・分かった」

スズナは答えた。

### 第三十九話：空気玉

目の前にいるロリコン医者の本気を一度でも見てみたい、スズナはただそう願う。

魔法使いのたまごにとって、カイトの存在は、

「歩く教科書って本当に存在するのね」

「言い方を改める。せめて有能な医者ぐらいにな」

売り言葉に買い言葉。

それを見事にやってのける二人は、お山の大将に会いに行こうというモードだった。

「だいたい、カイトは出し惜しみすぎるのよ！

そついうのって厭味にしか取られないわよ！」

「弱者相手に全力で戦うほど俺は凶暴じゃないんだよ、おてんばとは違って」

「なんですって！」

久しぶりだと思った。

少し前まで瑞貴とこうやって喧嘩していたのに、もう遠い感じがしている。

「……そろそろ気を引き締めろ。

ここのお山の大将だけは俺も少々力を解放しなければならない。それとスズナ、お前にこいつを渡しておく」

「空気玉？」

「なっ！ 知ってたのか！」

天地がひっくり返ったような表情をカイトは浮かべた。

「あのね、私はこれでも優秀だって言っただじゃない！  
いい加減にしないと本気で殴るわよ！」

そういいながらストレートを繰り出し、さらに回し蹴りまで繰り出すが、

カイトは軽々とよけた。

「まだまだ甘いな。とりあえず、そいつはまずくなったら飲め。効果は二時間だ。」

その間に俺が奴を倒せない場合は命を諦めろ」

カイトは真剣な顔をしてスズナを見る。

さすがに今回は本気らしい。

「……分かったわ。」

だけど、戦うからには勝ちなさい。

私はこのまま死にたくはない」

「霸王のためか？」

「未来のね」

カイトは笑った。それを見てスズナはストレートに言っただけ。

「……そんな表情出来たんだ。子供受けしそうな」

「遠回しにロリコンと言いたいのか？」

「うん、そう取ってくれていいわ」

談笑はここで終わった。

毒霧が周囲に満ちていく。



「なっ！ 苦しい！」

「空気玉を飲め。おいでなすったか、暗黒導師様」

カイトも空気玉を口に二つ入れる。

「カイト！ あんたそれ！」

「ああ、俺はもって3分。最悪の場合はお前が闘え」

カイトはまるでスズナを試すようなことを言っていた。  
いや、始めから試すつもりだったのだ。

「カイト・グランド、随分嘗めた真似を」

「ああ、そういうことだ。まずは三分間でお前の技を出し切らせる」

カイトは笑った。

#### 第四十話：風を纏うもの

黒のマントを被った魔導師は、非常に気分が悪くなるような威圧感をスズナに叩き付けてくる。

それに加えて毒の霧。

出来ることならば早くこの場所から去りたいものである。

だが、目の前にいる医者には何を言っても無駄なのだろうが・・・

・

「スズナ、この三分間で相手の動きをよく観察しろよ。

ついでに俺の戦い方もだ」

どこまでも不敵な男だとスズナは思った。

しかし、おそらく動けば三分間も息がもつとは思えない。

「カイト、その必要はないわ」

スズナは魔力を解放した。

「助けてもらった借りをここで返す！

こいつぐらい二分で片付けてやるんだから！」

スズナは暗黒導師に殴り掛かっていくが、

「口ほどにもない」

「きゃあ！！」

スズナは軽く弾き飛ばされ、カイトは岩場に激突寸前で受け止めた。

「熱くなつて迷惑かけるな。」

さすがの俺でも一秒で奴は倒せん」

「だけど！」

「いいから見てろ。魔導師を相手にするときは相手を崩すのが鉄則だ」

そして起こる地割れと岩石の弾丸が暗黒導師に襲い掛かる。

「うそつ！ 二つの魔法が同時に起こるの！」

「いや、正確には一つだ。」

「混ぜてるだけの話だからな」

カイトは瞬時に暗黒導師に殴り掛かる。

「うまい！」

安定感のある戦い方とはこの事なんだろう。

だが、相手はカイトがすぐには倒せないというだけあり体術の心得もあるようだ。

カイトの拳を紙一重でよけていた。

「それでもダメならトラップを張れ、または魔力で相手を圧倒しろ」

カイトの両手足に風が巻き付く。

それを身に纏って空を蹴りあげた。

「遠距離攻撃か。ならば返してやる」

暗黒導師は呪文を唱えカイトの魔法をスズナに返した。

「スズナ！ そいつを受けろ！」

「ええっ！？」

防御の構えだけして、スズナは攻撃を受けた。

しかし、ダメージはない。むしろ力すら沸いてくる。

「俺がしてやれるのはここまでだ。あとはお前が何とかしろ」

そう言っただけでカイトは息を止め、結界を張って座り込んだ。  
間違いなく時間はない。

「カイト……ありがとう」

スズナは力を解放した。

それは間違いなく今までのスズナの力とは桁違いだった。  
風が彼女に味方している。

「いける。これならあんたを確実に仕留められる」

ふわりと風の力を身に纏い、スズナは暗黒導師に突撃した。

「先程と変わらない戦法だな」

「でもあんたはカイトの作にはまってる」

暗黒導師はスズナを弾き飛ばそうとしたがそれが出来ない。  
それがカイトの策だった。

「拳に全魔力を集中。それを相手に叩き込む！」

「ぐはっ！！！」

勝者は決まった。

## 第四十一話：ライムジュース

あの時、どうして手を離してしまったんだろう。  
死んでも離すものかと思っていた。

しかしスズナに、いや、メイリンが語りかけてきた。

「大丈夫、私を一度だけ離して。  
すぐにあなたが見つ付けてくれるのでしょ？ 覇王」

「瑞貴、それぐらいにしておけ。  
長の任務はこいつらを生け捕りにすることだ。殺せとは言われていない」

「・・・悪かった」

掴んでいた首を簡単に離す。

スズナの国を滅ぼした闇界の連中を締め上げ、  
天界に引き取らせるのが任務だった。

スズナと離れて約一週間、未だ瑞貴は天界に縛られている。

「これでスズナを探しに行ける」

「いや、まだダメだ」

ヤンロンは間髪入れずに言い切った。

「ヤンロン、俺達は一度は天界から抜け出したんだ。  
師匠の顔に泥だけは塗らないように任務は遂行した。  
もつ戻る必要はないはずだ」

瑞貴とヤンロン、セディは普通なら天界から追放という罪を犯した。

しかし、彼等のなき師匠の遺言により、一度天界から抜け出すことがあろうと、それを罰してはならないと書かれていたため、天界追放からは逃れたのである。

その恩に報いるためか、瑞貴達は任務だけは遂行してスズナを探す決めていた。

その時こそ天界から追放されても構わないと……

「確かにね。天界に未練はあるでしょうけど、こだわるタイプでもないでしょう?」

セディはいたずらっぽい笑みを浮かべた。

「誰が天界に戻ると言った。

この近くにあいつがいることを忘れたのか?」

その一言に二人ははっとする。

これからの戦いで仲間にしておかねばならない地界人が一人いる。

「確かにね。闇界に行くなら戦力は多くて問題ない」

「そうね。スズナちゃんを守ってあげるのも余裕があるぐらいがちょうどいいもの」

意見はまとまった。

三人は一瞬のうちにその場から消えた。

甘ったるい匂いがする酒場。

木で作られたカウンター席の席。

女性に人気のあるカクテルを作るバーテンダーは、真昼間から店に入ってきた青年にライムジュースを差し出した。ただ、砂糖たっぷりのだが。

「辛口の酒を飲む男が何故こんなに甘党なのか」

バーテンダーは苦笑しながら言うと、青い目をした青年は答えた。

「多分先祖が甘い物好きだったからだよ。  
だからやめられないんだ」

グラスの中の氷がカランと音を立てる。

「また面白いことを言う。シルフィード家は代々変わり者だということだけは知っているが」

「それこそ仕方ないさ。シルフィードは覇王の仲間だったんだからさ」

青年は一気にライムジュースを飲み干した。



## 第四十二話：魔導師リック

軽工業が発達する港町、名をウォータータウン。

人口自体は少ないものの、出稼ぎには持ってこいだ。

その軽工業を束ねる長はやはり存在している。それがシルフィード家だ。

「これはこれは瑞貴様、ヤンロン様、セディ様、お久しぶりにございます」

初老の男は深々と頭を下げた。

シルフィード家の執事、セバスチャンである。

「ああ、久しぶりだ。あいつはいるか？」

瑞貴の問いにセバスチャンは首を横に振り、

「坊ちやまは町にお出かけです。いつ戻られることやら」

「相変わらずか。気配まで消しているようだしな」

相変わらず面倒な奴だと瑞貴は溜息を付いた。

「心あたりがあるといいが」

「そうでございますな、おそらく酒場を転々としていることでしょう。」

特に最近では

「コロナ」という酒場に行くそうです」

セバスチャンの読みは見事だった。

まさにそこにいたのだから。

「コロンか。行ってみる」

三人はその場から消え去った。

「いつになく長居だな。」

今日はどこかの彼女と待ち合わせかい？」

「いや、王子様方がここに来ると思ってね。ただ、女神様もやってくるよ」

苦笑しながら青年は答えた。

自分から出向けばいいのだが、それはそれでつまらないらしい。

「それは楽しみだ。女神様はどんな酒が好みだい？」

「強いからなあ、ウォッカをブランデーで割るぐらいでいいんじゃないか？」

「それは見事な酒豪だ。だったら甘めのものもたまにはいいだろう」

数種類の瓶をマスターは吟味し始めた。

そしてフルーツもいくつか取り出す。

「さあ、後はお客様を待つとしようか」

「招かれざる客も来たようだが」

乱暴に開けられた木の扉は開けた当人達の荒れ模様を表していた。

「シルフィード・リックはいるか？」

「俺だ」

リックは簡単に名乗り出る。

「そうか、随分な優男じゃないか」

「そりゃまだ十九歳なんで」

いたって真面目にリックは答える。

「ガキが酒場か」

「この国は十八から酒が飲めるんだ。せめて半人前と言ってもらいたい」

飄々とした態度は男の勘に触った。

さつきから間髪入れずに返してくるのだから。

「そうか、ならば男として扱おう。だがその前に聞く。

テキサス一家に殴り込み、大切な姫を連れ出したのはお前か？」

「ああ、あの子は国に帰りたいといってたから手助けをしたまでだ」

答えた瞬間、銃弾がリックの頭を貫通した！

「そうか、これで報酬はたんまりだ。

テキサス一家から姫を連れ出した極悪人を撃ち殺したんだからよ」

「へえ、俺を男として扱うってそういう扱いか」

頭を打ち抜かれたはずのリックが笑う。

「なにっ！！」

「俺に銃弾は効かないんだよ。魔導師なんぞね」

それを聞いて店のマスターだけが驚かなかった。

#### 第四十三話：合流

魔導師などという存在が認められているのもスズナ出身の幻想の国、カイトのグランド帝国、そして異世界のみである。

それがこの場ににいるのだから驚きだ。

「こら、人を化け物みたいに見るなよ。

都会にはいろんな魔法使いがいるんだぞ」

都会おそるべしと言い切った青年はやはりどこか掴みどころがない。

しかし、それが恐怖を増加させるから不思議だ。

「とりあえず、テキサス一家からの報酬は失くさると思うからさ、今のうちにトンスラこいた方がいいと思うぞ？

じゃないとあんた達みたいな賞金稼ぎでしか生きていけない人間にとったら、この港町は過酷だろう？」

言っていることは正しい。

マフィアで生計を立てているテキサス一家は、自分達の汚点になる存在は消すはずだ。

特に賞金稼ぎぐらいなら簡単に消せる。

「リックの言うとおりだ。早く逃げた方がいいと思うぞ」

マスターもグラスを拭きながら悠長にいう。

結果は火を見るより明らかだ。

「くそっ！！」

賞金稼ぎ達は逃げ去って行った。

「そのテキサス一家の頭領が忠告してるのも変な話だな、マスター」  
「その一家にお前を使ってお姫様を救助させるのも一興だと思わないのか？」

二人は笑った。テキサス一家の頭領はこのコロンのマスターなのである。

「いいけどさ、マスターがあのお姫様を幻想の国から掠って来いといった癖に、

どうしてまた戻すような事にしたんだ？ まだ国自体は危険なはずだろう？」

「確かに。だが、あのお姫様はお前以上の魔力を持っていたらどう？」

「だったら幻想の国はすぐに復興するさ」

マスターはライムジュースをリックの前に置いた。

「レディア・メイリン、やはり女神メイリンの血筋だけあって美人だったな」

「だが、メイリンの生まれ変わりじゃないぜ」

突如乱入した少年の声。

その少年にリックは満面の笑みを浮かべた。

「ようやく来たんだな、霸王」

「お前がうるつくからだろう？」

「ヤンロンも久しぶり」

リックはずっとセディの前に片膝立ちになった。

「光の女神セディ嬢、今宵は私目と飲み比べなどいかがでしょうか」  
片手を取り、その手に口づけようとしたところ、ガコンと踵落しが一発。

「馬鹿がさらに馬鹿をやるな、いらつく！」

瑞貴は鋭い眼光をリックに向けた。

「いてえな、本当に冗談が通じない霸王だ」

「当たり前だ。それより、しばらく俺達に付き合え。闇界に行く」

リックはニツと笑った。嬉しいからだ。

「メイリンの生まれ変わりがいたのか？」

「ああ、想定外のお転婆だな」

瑞貴はそう言いながらも、心の奥底の気持ちは隠せなかった。

#### 第四十四話：婚約者

色気より食い気、それがスズナ・メイリンである。

そしてその少女が食べる量は、目の前の医者数十倍だ。

「おい、腹八分目にぐらい出来ないのか？」

「バトルの後はお腹が空くの！」

「食べないならその角煮もちょうだい！」

「太るな、将来」

角煮を差出ながらも毒を吐くことは忘れない、それがカイトだ。

「大丈夫よ！ これでも痩せてる方だと思うしね。まっ、胸は大きくなってるけどさ」

「へえ、腹の方が出てる気がしたが」

医者の冷静な見立てである。

しかし、さらに胸を押さえることも見抜いてはいるが。

「相変わらずね。やっぱりあの毒の中に置いてくるべきだったのかしら」

「それは無理だな。お前の性格はだいぶ掴んだからな」

暗黒導師との戦いの後、スズナはカイトを担ぎ風の力で毒霧から抜け出し、そして今いる食堂街まで飛んだのである。

幸いカイトが医者だったせい、酸欠の処置はすぐに終わった。

だが、魔力を使いすぎたスズナの代償は見事食欲に出ているのである。



「とにかく、食い終わったら俺は一度婚約者の顔を見に行く。お前はこれからどうする？ 瑞貴を捜す旅に出るのか？」

スズナは言われて考えた。

カイトといたのも直感で自分を守るためと思っていたから。しかし、危険な場所から遠退けば瑞貴を探すことが優先される。

「そうね、瑞貴は探しに行く。

だけだと思うのよ、あまり動かない方がいいって」

昔から直感は働く方。そして、まだカイトから離れるべきではないと思う。

「メイリンの血か・・・だったら付いてこい。特別に俺の婚約者に合わせてやる」

「・・・見せたいんでしょ、ただ単に」

スズナは呆れながら言い切った。

グランド帝国から少し離れた小さな丘。

とはいえども、平野に広がる帝国を一望することは出来る。

その丘に小さな二階建ての家があり、働き者の少女は今日も恋人の無事を祈りながら待っていた。

「おじいちゃん、おばあちゃん、今日はカイト様が戻ってくるかな？」

小さな少女は優しい祖父母に話し掛ける。

「ええ、カイト様は戻っていらっしやいますよ。  
愛様がこんなに無事を祈っていらっしやるのですから」

祖母は穏やかな笑みを浮かべた。

まるで孫のようにかわいい愛の成長を見ることが出来る。  
しかもしっかりした働き者。こんな幸せは滅多にあるものではない。

「じゃあ、今日はご馳走にしくちや！」

カイト様はいっぱい食べてくれるもんね」

太陽のような笑顔とはまさにこのこと。

弱冠十二歳の少女は、非常に恋にひたむきだった。

その十二歳の婚約者はとスズナが初めて出会うのはあと数分後だった……

## 第四十五話：愛

穏やかで涼やかな丘。

何となくカイトが好みそうな土地だ。

心の中の故郷がこんな場所ならきつと人の摂理に反するものではない。

スズナは素直にそう感じた。

「いい場所ね、カイトの婚約者がいるところ」

「当たり前だ。あいつがこの場所にいるから全てが澄んで見える。

今はお前がいつもよりマシに感じれから尚不思議だ」

憎まれ口を叩きながらもすでにカイトにスズナの反論は聞こえていなかった。

たった十二歳の恋する乙女に二十五歳の男は惚れてるわけだ。

自分でも犯罪だと思ってしまうが、小さな頃から自分を慕ってくれた愛を放すことは出来ない。

どこかの馬の骨がやって来た日には、医療と魔力を駆使して撃退する気は満々だ。

「とりあえず、間違いなくいい女だとお前が思わないわけがない。

思わなければすぐに処刑だ」

「・・・分かったわよ」

目が本気だ。だが、感じてはいる。

不思議な精気がこの丘に取り巻いていて、それはスズナの心も洗われていく感じ。

今まで毒霧の中にいたからこそ尚更とも思うが。

「あそこだ。愛！」

カイトが叫んだ名前。

確にかわいい名前だなと思った瞬間、名前にこれほどふさわしい人間がこの世にいたのかと思える少女が小さな家から飛び出して来た。

「カイト様……！　よくご無事で！」

小さな少女は軽々とカイトに抱き上げられる。もはや二人の世界だ。

「心配かけてすまなかった。

愛も寂しかっただろう」

「いいえ、カイト様が無事なら私の寂しさなど……！」

スズナは固まった。フリーズした。

犯罪だと犯罪だと犯罪だと……！！

「カイト……！　あんたはこんなに可愛い子に毒牙を向けてるの……！！

愛ちゃん！　騙されたらダメよ！　カイトは憎まれ口大王で性格はとんでもなく歪んでるわ！

守るなら私が愛ちゃんを守ってあげる！」

「スズナ様……」

愛はキョトンとしたが、名乗ってもいないスズナも驚いた。そして青筋立てるカイトの説明が入る。

「スズナ、愛は精霊使いで人の情報を聞く力がある。それに魔力も医術もさらには性格や容姿もお前の上。

唯一お前が愛に勝ることがあるなら体重と身長、それと馬鹿力だけだ。おっと、食欲もあつたな」

やっぱり憎まれ口大王。しかし、なぜかカイトに言い返すことが出来ない。

愛がこの場にいる性かもしれないが……

「カイト様、私以上にスズナ様のお力はすばらしいものです。だから御弟子様に迎えられたのでしょうか？」

愛は微笑む。カイトもそれだけは否定しないらしい。

「でしたらお願いがあります。

スズナ様を未来の霸王の元へ連れていき、カイト様もお力になってあげてください」

「愛！」

カイトは驚いた。まさかいきなりそんなことを言われるとは思わなかったからだ。

「感じているのでしょうか？ グランド帝国にも闇界の勢力が迫って来ている。

立ち向かうためにはカイト様のお力が必要なのです」

「しかし……」

「行ってください。霸王はあなたを求めています。メイリン様と同じように」

愛は深々と頭を下げた。



## 第四十六話：ふりだしに戻る

カイトが愛と出会ったのは、嵐の奴隷商船から愛を助けた日。焦げ茶色の髪は雨に濡れ、黒い瞳は涙が溢れ、肌は傷だらけだった。

しかし、カイトは愛に引き付けられた。

「大丈夫、絶対に死なせはしない」

カイトは五歳だった愛を抱えて人買い達を次々と擦伏せていった。そしてすべて片付け終わり、愛に向かっていうのだ。

「名前は何？」

「……愛」

涙を流しながら愛は答える。

「そうか。愛、この嵐を止めてくれるか？」

このままだと船が持たなくなる」

「……はい」

嵐はおさまった……

「カイト、カイト！」

「ん？」

スズナの呼ぶ声にもあまり反応を見せない。愛とせっかく会えた

というのに、また離れることが嫌だというのは一目瞭然。  
それも二十五歳の男が十二歳の女の子と離れたくないというのだから……

「もう、愛ちゃんと離れたくないのは分かるけど、精霊使いがカイトは動かないといけないって言ってるんでしょ？  
だったら行くしかないんじゃない？」

もつともである。もともとグランドの血を引くカイトは、スズナと同じように国の危機には立ち上がるようにとは言われていたはずだ。

それが嫌で家出したのだろうが、愛を置いて長い旅に出ることはもつと嫌なのだろう。無気力にしかない。

「スズナ、俺が力になれという霸王はどんな奴なんだ？ 俺以上に強いのか？」

カイトの問いにスズナは腰を下ろして話始めた。

「そうね、まだカイトより弱いと思う。  
だけど誰よりも霸王になることを望んでいる。敖瑞貴はそういう奴よ」

付け加えるならまだいろいろあるが、今のところは抑えておくことにした。

「敖……敖……竜王の血筋か。  
面白い奴だ。天界の王家が地界の霸王の称号を求めるなど普通じゃないな」

「だから私は力になろうと思った。あいつを絶対霸王にしたいと思



った」

スズナは真剣に答えた。

理屈などいらぬ。スズナは瑞貴だから霸王になる資格があると直感したのだ。

この世界の全てを救ったもの、その伝説を完成させる器が瑞貴にはあると思った。

「……惚れてるわけだ」

「違うわ、力になりたいの。メイリンが霸王の翼になったように」

恋とは違う感情。スズナはあくまでもそう言い切るが、これから瑞貴と再会したときに何を言えば良いのかは予測は付かなかった。

「自分の気持ちにまだ気付かないうちは子供だな。

とりあえず会うだけは会ってやる。

敖家の霸王が俺が納得するほどの器なら力は貸してやるさ。

だが……愛がな……」

ふりだしに戻るである。

愛が心配なのは分かるが、危険な場所に連れていくつもりなど毛頭ない。

そして、愛も着いていくべきではないとあの時言っていたのだ。

「瑞貴……」

未来の霸王に全てを任せるしかないようである……

#### 第四十七話：約束を守るもの

愛は歌う。その声は風の精霊達に反応して柔らかな風を作る。  
ただ、今日は何かが違っていた。

「ねえ、おじいちゃん、おばあちゃん」

不安な声が風に乗る。

「グランド帝国に何か起きる」

「カイト、いい加減にそのロリコン何とかならないの!？」

愛ちゃんに愛想尽かされるのも時間の問題よ!」

「ふん、愛が俺を嫌いになるわけもないだろう。」

二人の前にあるのは絶対的な愛だ。お前が思ってるほど軽くはない  
「い」

落ち込んでいる癖してここだけは自信に溢れたロリコン医者。  
だが、それでも瑞貴に会わせるまで自分はここから動いてはならないと告げられる。

自分じゃない誰かにだが……

「とにかく飯だ。お前がいる時点で今日の愛のご馳走を残すとは思えんが、

残したときは胃解剖手術してでも食わすからな」

「カイト、それはないわ。愛ちゃんが料理上手だってことはこの匂いで分かるもの」

スズナは溶けていた。

小さな家から薫るスープやパンの焼ける匂い。鼻まできくスズナにはその他多くのご馳走がすでに体に満たされている感じすらしていた。

「ならいい。早く食いに行け」

「カイトは？」

てつきり自分より早く食べるなと言われると思っていた。  
だが、カイトはグランド帝国に視線を向ける。

「俺はグランド帝国に行く。

何かが来ているようだからな」

「ダメです！ カイト様！」

愛が涙を浮かべながら家から飛び出して来た。

「カイト様、これはドール化の前触れです！

カイト様お一人では殺されに行くようなもの！ 愛もお連れください！」

「何ですって！！」

いきなり告げられたことにスズナは驚いた！

スズナの国を滅ぼした闇魔法。

よつぽど運がいいか術者より強い魔力を持たない限り操り人形となる恐怖の魔法。

それがグランド帝国に齎されれば明らかに世界は崩れていく。

「愛、お前はスズナとここにいろ。

スズナも気付いていると思うが、暗黒導師より性質の悪い奴らが

近づいて来ている。

奴らと戦うにはせめて俺と同等じゃなければ足手まといだ。幸いこの丘は聖山と言われドール化は一切掻き消してくれる。もちろん俺が多少の結界を張り巡らしておくから心配せずに待っていてくれ」

優しい顔がこの男にもあるんだとスズナは思った。それには愛も答えるしかないことを知っている。涙を拭いて愛は家に戻って食事と荷物を持ち出して来た。

「武器はおじいちゃんが磨き混んでくれています。おばあちゃんが魔力と空気玉を作ってくれました。愛は食事しか出せないけど食べてください！」

戦士を送り出す妻、まさにそれだった。しかし、それがカイトには嬉しかったのだろう、荷物を背負って愛のスープを飲み込んだ。

「うまい、さすがは精霊使いだ。きつと無事に帰って来れるから、スズナの面倒は頼んだよ」  
「はい、カイト様……」

そしてカイトは立ち上がると、グランド帝国へと飛んでいった。

「……愛ちゃん」  
「……スズナ様、カイト様はお強い。そして必ず約束は守る方です。だから、あなたは少しだけここにいてください。」

私はスズナ・メイリン様をお守りします」

愛は深々と頭を下げた。

## 第四十八話：待っていたもの

「私を守る……？」

スズナは愛に尋ねた。

「はい、それがカイト様と私の使命。

きっとスズナ様がカイト様の前に現れたのも、全てはメイリン様の生まれ変わりであるスズナ様の自己防衛、私はそう思います」

今言われれば確かにそうかもしれないとスズナは思う。

カイトは何も悟らせないように自分を守る術を教えてくださいながら守っていた、そうとは取れるのだ。

「だけど愛ちゃん、カイトを一人でグランド帝国に行かせて良かったのかな」

ドール化自体は心配ない。カイトの魔力はそれぐらいは跳ね返せることは知っている。

だが、気になって仕方ないのだ。

自分が離れてはいけなかったのではないかと……

「カイト様は覚悟はしています。

おそらく無事ではすまされないと精霊も騒いでいます」

「愛ちゃん!!」

「だけど!! カイト様はスズナ様を守れとおっしゃってくださいました。

だから待つしかないんです。カイト様の言葉だけは絶対だから……!!」

強く、なんでこんなにせつないんだろう。  
自分の存在が二人を苦しめている。

ここで動けばさらに苦しめる。

スズナはどっちにも進めない。

「だけど・・・!!」

爆発が起こった！ グランド帝国だ！！

「カイト様!!」

「大丈夫！ カイトは死んでない！」

スズナは直感した。丘から見えた爆発は確かに大規模なものだったが、

カイトが巻き添えになった感じはしなかった。それは確かに言えたこと。

「愛ちゃん！ ここも危なくなる。

一旦家に入りましょう！」

「はい！」

二人は家に駆け込んだ。

爆風が二人を早く家の中に入らすように背中を押す。

風の精霊が二人を守っていた。

「おじいちゃん、おばあちゃん!!」

「大丈夫です。私達もお二人をお守りします。

カイト様から預かったのですから！」

焦っている。スズナはそう取った。

確実に来ている足音、それは冷たいもの。

まるで自分達をここに閉じ込めようとしているものがある。  
しかし、それには逆らわなくてはならない。

「・・・愛ちゃん、私はやっぱりここから戦いに行く」

「ダメです！ 危険過ぎます！」

愛はスズナの腕を掴んだ。

しかし、スズナはそれを振り払う。

「今ここで私が動かなかつたらカイトは死ぬ！！ 愛ちゃんも分かるでしょう！！」

「うつうつ・・・！！」

愛から涙が溢れた。

分かっている、分かっていたのだ。

「カイトは私を、メイリンを守るために戦ってる。

だけど私はスズナなの！ 霸王を守るために私がいるならその仲間を見殺しにはしない！

だから私は行く！ カイトは絶対連れて帰ってくるから！！」

「出来ればな」

勢いよくドアを開けた瞬間、スズナの肩に鋭い痛みが伴った。

「くっ！！」

「スズナ様！！」

「出るな」



さつと愛の前に立ちはだかる青年の影、そしてもう一人の青年と美女が家を取り囲んでいたものを次々と片付けていく。

「全く、お前は どうして つつこむ？」

相変わらずの あきれ口調。

しかし、その声の主をスズナは待っていた。

「瑞貴・・・！」

未来の覇王がここにいた。

## 第四十九話：戦火上がる帝国

しばらく会っていなかった瑞貴はどこか色香が漂っている気がした。

初めて会ったときは水のような感覚さえ覚えたが、今は・・・

「瑞貴・・・」

「何だ？ 相変わらず間の抜けた顔だな」

出会って早々憎まれ口。

いつもならここで鉄拳の一つは飛んでいたはずだが今日はない。

「おい、何か反応ぐらいしたらどうだ？」

スズナを小突くが何も答えない。

さすがの瑞貴もこれには手付かずとなる、はずがない・・・

「そうか、だったらおとなしくしとけ」

スズナの頬に手を当て、その唇を奪おうとした瞬間！

「ふざけんな！！」

間一髪、瑞貴はスズナの鉄拳から逃れた。

「あんたはいつになったら私を探しに来るのよ！

こんなピンチにならないと現れる気すら起こらないのか！！

揚げ句の果てにはまたセクハラしやがって！ こっちがどれだけ

心配したと思つてんのよ!!」

「無茶苦茶だな……」

とは言いながらも、その分だけスズナが心配していたと思えば悪気はしない。

多少の罪悪感というものは瑞貴にも存在する。

「何とかしなさいよ！ カイトが敵中に一人であの爆発の中に飛び込んだんだから！」

「カイト？ カイト・グランドか!？」

「そうよ!!」

スズナの鉄拳を避けながら瑞貴はヤンロン達の方を見た。  
感じたことは同じようである。

「スズナ、そいつが揃ったら今度こそ閻界に乗り込む！  
お前がカイトを引き寄せたんだ、絶対に仲間に加える」

パシン！ という音とともにスズナの気はおさまった。  
瑞貴のたった一言で全ては動き始める。

「ヤンロン、セディ、リック、スズナ！

カイトを助けて閻界に乗り込む！ 覚悟していけ」

「オウ！」

士気は上がった。

その頃、爆発が起こったグランド帝国でカイトは余裕で戦っていた。

「し……ね……!」  
「あまいな」

ドール化した下級魔導師などカイトの敵ではなかった。  
次々と襲い掛かってくる敵を簡単に倒していく。

「さて、今回の根源を叩いておきたいがどうやらまだ出て来る気配はないか……」

瓦礫の山にずっと立ち、神経を集中させて敵の動向を探る。  
おそらく高見の見物を決め込んでいるであろう人物に。

「……城か。王侯貴族趣味でもあるのかね」  
「違います。王族たるもの、格式ある城に住むのが定石かと」

紫のロングヘアーに青い目、間違いなく地界の空気を持たない女  
はカイトの背後に立っていた。  
藍色のベールと魔導師の服、それだけでも女が強いと分かる。

「確かに、あんたが一兵士ならそれだけの器はありそうだ」

カイトは女を見据えた。攻撃を仕掛けてくる気配はない。

「とりあえずこの国のドール化を解いてくれないか？」  
さすがに国中の奴を介抱する魔力は持ち合わせていなくてな」  
「フツ、不思議ね。国を滅ぼす魔力はお持ちなのに」  
「医者なんだ、人間の命は大切に作る人種なものでね」

カイトは微笑を浮かべた。

ここでこの女を倒すことは出来る。しかし、その上に君臨する彼女の主は間違いなくカイトを越えたレベルだ。  
力は温存しておきたかった。

「そう、主はあなたが使えるなら生かしておくようにとおっしゃっていましたが、どうやら相いれない思考をお持ちのよう。  
ここで死んでいただきます」

戦火が上がった。

## 第五十話：崩壊

天界、闇界の者の寿命は長い。

特に闇界の中には数百、数千年の歴史を生きているものすらいる。つまり、霸王を見たものも少なくはないということだ。

「ルチル？ 何なのそいつ」

聞かされた名前にスズナは尋ねた。

「お前の国を滅ぼした連中の一人だよ。

闇魔法の使い手で闇界でも多少の権力を持つ貴族だ。

まあ、グランドの血を引く奴の敵ではないだろうが、奴の主が何の策もなく戦わせるとは思えない」

瑞貴の勘は当たっていた。

「あらあら、幻術の類も跳ね返されるとは思っただけで、グランドの子孫にしては弱いね。

あなたに顔はよく似ていたけど、実力は彼の放が断然上のよう」

カイトは膝を付いていた。

ルチルがかけて来た幻術は打ち破ることは手易かった。

しかし、この女の攻撃力は体を保つリミッターを解除しているかのようだ。

「……お前の主は随分長く仕える部下を簡単に切り捨てるよう

だな」

カイトは皮肉を込めて言うが、

「いいえ、それは違います。主は力の解放を手助けするだけ。例え私の体が壊れようと普通の人間のように治らないことはない。いい。」

どのような場面でも命があるだけで私は主の力で復活できる」

ルチルは優美な笑みを浮かべた。

「さすがは化け物か。先代霸王はあまり人の形をした生き物を殺したくはないという考えだったらしいな」

「ええ、そのあまい考えがなければ闇界を統べることも出来たでしょうに」

言っていることは正論。

そうでなければ封印という形で霸王は戦いを終わらせることはなかったはずだ。

「だけど私達は滅ぼされなかった。

でもあの子達はもう生きてはいない。

リスクファクターのみを葬れば闇界が全てを手にする。

主もそれを望んでおられる！」

「魔封結界！！」

強力な魔法をカイトは防ぎ反撃に出る！

「体術の方は苦手のようだな！」

「品のないことはするべきではないわ」

ルチルの張ったバリアを素手で打ち砕き、そのまま顔面に入るかと思われたが、

「……！ 幻術か！」  
「そのとおり」

光の雨がカイトの体を強く打った！

「くっ！！」  
「さようなら」

ルチルはカイトの腹部に手を当て、消滅の魔法を放った。

「……消えたわ」

跡形もなく、カイトは消え去っていた。  
幻術にかかっている感覚すらルチルにはない。

「終わったようだな」  
「主……」

ルチルはひざまずく。  
自分の主であるサタンが目の前に現れたからだ。

「ご苦労だった。しばし休むがいい」  
「勿体ないお言葉……」

ルチルは深々と頭を下げる。



「何、このままお前は永遠に眠るのだからな」

「何を!!」

世界が碎ける！ 自分が消滅していく！

「崩壊術、つまり自然の摂理・・・」

サタンの顔がカイトへと変わった。

「お前は強者に負けたんだ」

ルチルはその場に崩れ落ちた。

## 第五十一話：対面

「カイト！」

「スズナ、お前何しに来た？ スマン…足手まといにか」

「何ですってえ！！」

カイトがピンチだと思ってくればこの憎まれ口である。心配はしていたと言ってやるのも吹き飛んだ。

「で、そのお連れ様が瑞貴殿か。確かに霸王の素質は高いな」

口元が微かに釣り上がる。絶対的な自信を持つ男の顔、瑞貴はそれをカイトに向けた。

「だが、ガキ加減はスズナとどっこいどっこいか…」

「なめるな、俺は限りないSを求めてる人種だ。多分あんたといい勝負だぜ？」

十数秒の目と目のやり取り。それがすんだ途端カイトは爆笑した。

「気に入ったよ霸王！ 改めて、俺はカイト・グランド。医学大国グランドの皇子だがただいま家出中だ」

「俺は熬瑞貴。天界の東海青龍王の息子だがただいま家出中だ」

スズナはこの時ようやく気付いたことがあった。この二人は似ているのだ、ちよつとした言動や空気が…

「じゃあ、一緒に閻界に来てくれ」

「それはダメだ。俺には婚約者がいるからな」

即答。あくまでも愛がないとダメらしい。

「だったらその婚約者も連れて…」

「危険な目に遭わせるのもゴメンだ。あんなに可愛くて可憐で儂くて愛おしくて」

以下省略である。

「もういいから…。瑞貴、カイトには愛ちゃんがいる限り動けないのよ。」

だからカイトはこの場だけ力を貸してもらって」

「ダメだ」

即答である。

「ダメってあんたねえ」

「全体を守って一人の女を幸せに出来ることがある」

少しスズナの心が揺れた。

確かに瑞貴の言うことは一理ある。

「だが、それで一人を不幸にすることだつてあるだろう?」

「ああ、ただどあの子が求めてたのはお前が巢立つことだろう?」

言われて気付くことはある。

愛は守られることよりカイトの幸せを祈っていた。

愛は気付いていたのだ。本当はカイトが世界を歩きたいことを…

「…罪滅ぼしなんてあの子が求めているものか?」

瑞貴はさらに核心に迫っていく。

「誰かに聞いたのか？」

「ああ、風の精霊が語ってくれた。」

お前はあの子を助けることは出来たが、あの子の両親も兄弟も助けられなかった。

嵐の奴隷船の中、お前はあの子だけ助けるのが精一杯だったんだろ？」

しかし、カイトは首を横にふった。

「…俺は気まぐれで愛だけを守って愛の両親も何も助けようとはしなかったんだ」

本当に気まぐれだった。自分は正義の味方等ではない。

奴隷船なんていくつも見過ごして来たのに愛だけを助けたくなかったのだ。

「だけど愛ちゃんはカイトを恨んでないよ？」

「スズナ…」

「それに命を助けられて感謝している」

「しかし…」

「しゃきつとしなさい！ あんた愛ちゃんの婚約者でしょ！」

襟首を掴み今にも殴り飛ばしそうな勢いでスズナは突っ掛かった。

「愛ちゃんはね、あんたの幸せしか願ってないのよ！」

なのにいつまでたってもうじうじするな！ バカカイト！！」

いつまでも悩んでいるカイトを見てスズナは逆切れした。  
カイトが望んでいることはもう分かっているからだ。

「カイト、とりあえず闇界へ乗り込む話は後だ。まずはサタンをぶっ飛ばさないとな」

瑞貴は一度話題を切り替えた。

あくまでもこの国にいる理由は同じだからだ。

「…分かった。全て片付かなければ話にはならないしな」

スズナに掴まれていた襟元をすつと離しカイトは立ち上がる。

「スズナ」

「いつ!!」

スズナにげんこつ一撃。

「遅れるなよ。霸王は強い」

カイトに不敵な笑みが戻っていた。

## 第五十二話：時空魔法タイプ

「さて、どうしましょうか」

光の女神であるセディは美しく溜息をついた。とはいえども、ただの溜息でさえ美しく見えてしまうのだ。

「グランド帝国の魔導師なんだ。ドール化してるのに俺達に手加減しろという方が無理だろ」

二刀流の神兵隊長、ヤンロンは冷静に判断する。

「旦那の長い説教の幻術でもかけてみます？」

ウォータータウンの御令息、幻術使いのリックは脳天気に応えた。

「冗談はよせ。それよりこの国の魔導師達はスズナの国よりハイレベルだと聞く。気を抜くんじゃないぞ」

「そうね。じゃあ、少し動きを止めておきましょうか」

セディは呪文を唱え始めた。

「ねえ瑞貴、サタンって一体何物なの？」

「闇界の権力者。メイリンの血筋の癖して伝えられてないのか？」

刺のある言い方だがスズナは言い返さず答えた。

「伝わってるわよ。だけどサタンは霸王が封印ではなく滅ぼしたと

聞いてるわ。そいつが蘇ってるなんてありえない話でしょ」

「へえ、やっぱりただの馬鹿じゃないのか」

瑞貴は改めて感心した声をあげる。それに反論してやりたいがスズナはぐつと堪えた。

「なら話は早い。闇界に死者を甦らせる禁術を使った奴がいる。そいつらが今回の騒動の元凶だ。

まあ、サタンを締め上げたところで吐いてくれるかは謎だがな」

「その前にサタンを倒せるかでしょ？ 瑞貴の強さじゃサタンには敵わないこと確定じゃない？」

瑞貴は一度止まった。そしてスズナにげんこつを落とす！

「いったあ！ あんた普通女の子の頭にげんこつ食らわす！？」

「うるせえ！ お前は会ったびに人を弱いとしか言えねえのか！」

「弱いじゃない！ すでにカイトより弱いことは確定してるでしょ！」

「アホ！ 人の魔力ぐらい感じられるようになれ！ お前と初めて出会ったときの五倍にはなってるだろうが！」

「あんたあの時はフラフラだったじゃない！ 人の魔力まで吸い取らなかつたら時空魔法が使えなかつたんでしょ！」

カイトはピクリと反応した。

「瑞貴、お前時空魔法タイプか？」

「一応な。ただ、こつちの世界じゃ時空魔法は使いづらいからな」

カイトはそれを聞いて驚いた。しかし、スズナにはその意味が理解できない。

「カイト、何驚いてるの？」

「…スズナ、時空魔法タイプが少ない数だと言うことは知ってるか？」

「まあね。だけどそれが何なの？」

カイトは一つ溜息を付いた。少しは賢い少女だと認めていただけにその返答には呆れるしかなかった。

「いいか、ドール化した国では基本時空魔法は無効化されてしまう。国自体が呪われる魔法だから当然時間の類も相手に握られてしまうんだ。」

つまり時空魔法を使えるのはよっぽど魔力が高くなければ無理というわけになる」

「ふうん。だけどそれによって瑞貴の魔力も下がるわけ？」

その質問には瑞貴が答えた。

「確かに時空魔法タイプにとってはドール化した国は居心地は悪いさ。」

「けどな、下げておかなければ今頃俺達の周りは敵だらけになるぞ？」

「時空魔法を扱える者はドール化を起こした術者を倒せる可能性を秘めてるからな。術者なら当然自分が操る人形で相手を狙うのが筋道だ」

瑞貴とカイトの説明でスズナはあらかた理解した。

「じゃあ、セディ達と別れた理由って…」

「あいつらは図を買ってくれた。俺達はその間に術者を叩くってわ



けだ」

瑞貴はスズナの腕を掴む。

「カイト、そろそろ飛ぶぞ」

「了解した」

カイトが瑞貴の肩に手を置いた瞬間、三人はその場から消え去った。

## 第五十三話：祈り

歪んだ世界はどこか綺麗に思えた。瑞貴が傍にいてくれるならきつとどんな世界でも綺麗だと思える。表には出せないが、きつと彼を思っている…

「あんたは…飛ぶなら飛ぶっていいなさいよ！」

「別に置いてけぼりにしてないんだから気にするな。それより、生きた歴史上の人物が目の前にいるんだから気を抜くな」

スズナの目に飛び込んで来た人物は閻界の王座に就いていたもの。

「…サタン」

スズナの声にサタンはゆっくりと目を開けた。

「メイリン…グランド…そして」

サタンは立ち上がる。

「青龍太子として生まれ変わっていたか！ 瑞貴！」

突風が三人を叩き付ける！ その風が瑞貴の頬を掠めて血を流させた。

「知るかよ、霸王の時の記憶なんて俺には残っちゃいない。俺は霸王を目指す熬瑞貴で充分だ」

「瑞貴、一体どういうこと!?!」

その質問にカイトが答えた。

「お前がメイリンの生まれ変わりなら、瑞貴は霸王の生まれ変わりだということだ。

考えてもみる、文献に載ってたメイリンが霸王以外の魂に引かれると思うか？」

カイトの言う通り、メイリンは霸王しか見えていなかった。戦いの数々がそれを物語っていた。

「だけど瑞貴は東海青龍王の息子でしょ。霸王の血筋なんて全くないじゃない」

「確かにお前は霸王とメイリンの血を継いでいて瑞貴は全く霸王と関係ない。

だが、一個体として輪廻転生は行われるのなら当然霸王も誰かになる。それが瑞貴なんだろ」

サタンは瑞貴を見下ろした。そしてワイン色の魔法弾が彼の前に次々と浮かび上がっていく。

「…その私を不快にさせる目は全く変わらないどころかさらに強さを帯びた！

私を一度滅ぼした怨み、今日こそ晴らしてくれる！」

「カイト！」

「ああ！」

カイトは急いで結界を張りスズナを守る。雨のように降り注ぐ魔法弾をよけながら瑞貴とサタンは激突を繰り返した。

「ちよつと！ あんなデタラメを瑞貴一人で戦わせる気！？」

「お前が入れば邪魔になる。とにかくしばらくは俺の結界の中で大人しく祈ってる」

「祈るって……！ 祈って勝てる相手じゃない！ 私もいく！」

飛び出そうとしたスズナをカイトは腕を掴んで止めた。

「もう分かってるはずだろう。瑞貴はサタンと対峙した事で霸王の力が引き出された。その中に入ってお前に何が出来る？」

言われてスズナはすぐに返答できなかった。しかし、悔しさに震えながらも思いは言葉になる。

「出来ないわよ……！！ だけど、やっと会えたのよ？ 憎たらしい奴だけど霸王になりたいって夢を叶えたいと思ったんだ！

私は瑞貴を失いたくなんてないのよ！」

涙が零れる。瑞貴の力になりたいと心から願っているのに、スズナにはなにも出来ない。

メイリンの生まれ変わりだというのにその力は目覚めてくれないのだ。そして泣いている間も瑞貴は明らかに傷ついていく……

「メイリンは霸王の翼となると言った。それは霸王が地界人だから守りたいと思ったからだ。

だが、霸王が魔法を使えるようになったとき、メイリンは霸王の無事を祈るようになった。自分を守るために霸王は戦い続けたからな。

スズナ・メイリン、お前は何を守る？ 瑞貴か、仲間か、国か、それとも自分か？」

守りたいもの。そんなものはとっくに決まっていた。

スズナは涙を拭い、両膝を折って祈り始める。

「…古の精霊よ、大気動かす風よ、闇を貫きし光よ、我は汝達の主なり。霸王となりし熬瑞貴を守れ、我が愛しきものの力となれ！！」

スズナから光が放たれたと同時に、スズナはその場に倒れた。

「覚醒したか…メイリンの力…」

「だが、やっぱり無茶苦茶な奴だな。メイリンとは大違いだ」

瑞貴はニヤリと笑った。右手に凄まじいまでの力が集まってくる。

「生まれ変わりといえどもメイリンとは違うタイプのようだな」

「ああ、拳一撃必殺。だが…」

瞬撃がサタンの胸を貫く！

「充分！」

## 第五十四話：キスの理由と誓い

「もう一度言ってみなさいよ、そのふざけた台詞！」

「俺はここに残る」

「ふざけるなあ！！」

スズナはおもいきりカイトの襟首を掴んで振る。

「あんた瑞貴のこと気に入ったんでしょ！？ それなのにまだロリコン全開でいたいわけ！？」

「ふっ、俺と愛の間に歳の差などいまさら……」

「ふざけるなあ！！！！」

この冷静な大人ぶりが非常に気に喰わなかった。そこに瑞貴が部屋に入ってきた。

「スズナ、悪ふざけはいい加減にしとけ。お前の怪力は洒落にならん」

「あんたのために言ってるんでしょ！！」

スズナの怒りの矛先が瑞貴に向けられる。それが少しだけ嬉しくて瑞貴は口元が少し緩んだ。

「スズナ、サタンが泥人形だったことでお前はそのまま閻界へ突っ込んで平気だと思ってるのか？」

「それは……」

時は数日前、グランド帝国を襲ったドール化、さらにその元凶と思われたサタンを瑞貴は倒すことには成功した。しかし、サタンは

泥人形だった。つまり、泥人形にまだ自分達は苦戦するレベルだということ。

「いくらお前が馬鹿でも伝説と現実が一緒になるとは思っただろう？　それで例え俺がお前達と一緒に闇界へ行っただとしても結果は見えている。スズナ・メイリン、お前が霸王を殺す」

カイトに言われた言葉は重かった。それが事実だから…

「だが、瑞貴、お前は考えたんだろ？」

「ああ、確かに今のまま闇界へ行くことは自殺行為だ。まさか天界の全戦力と匹敵する力まであいつらが付けていたとは思わなかったからな。だから、俺達は一度西の大陸にいる『ユメビトの里』に行くと思う」

「ユメビトって…あの幻の民族って言われているユメビト？」

瑞貴とカイトは驚いた。普通この大陸で『ユメビト』という民族を知るものは少ない。それを知っているのはよっぽど知識のあるものだ。

「本当スズナは…」

「時々説明の手間が省ける…」

「私一応メイリンの血を引いてるんだけど…！」

スズナは拳に青筋を立てた。

「だが、ユメビトの力は確かに借りた方がいいな。それに一人ぐらい仲間に出来れば闇界での戦いも楽になる」

「そんなにユメビトって強いのかしら？」

スズナは少し疑問を持っていた。地界では幻の民族と讃えられているが、ユメビトは天界人の血も王族の血もない、ただ武人として栄えた民族である。それが闇界の者と互角に戦えるのかと不思議でならないのだ。

「まあ伝説を全て信じるのは厳しいかもしれないが、地界人の中では最強というのは間違いないだろう。それに何となく行かないといけない気がしてな」

瑞貴がまた綺麗に見えた。滅多に見せない真剣な表情を見せられるとスズナは何も言えなくなる。

「だからスズナ、お前もここに残れ」  
「えっ？」

スズナは目を丸くした。

「お前はここで一年間カイトに鍛えてもらえ。俺達と旅をするより今は強くなることを考えろ」

カイトは部屋を出ていった。これからは二人の問題だと関わりたくないからである。

「…瑞貴、あんたまさか!!」

「カイトにはお前を鍛えるように頼んだ。メイリンの力を完全に解放させることが出来るのは俺じゃない」

「あんたは…!!!」

スズナは瑞貴の襟首を掴む。今にも泣き出しそうな顔を向けて…



「悔しければ強くなれ、足手まといになりたくなければい上がれ、ただ、俺はいつもお前を守る強さでいる」

「~~~~!!!! 瑞貴、やっぱりあんたはム力つく…」

スズナはそれだけ声に絞り出した。瑞貴は苦笑しスズナの顎に手をかけて唇を自分の唇で塞ぐ。鉄拳が飛びそうになったが瑞貴がそれをさせなかった。スズナを抱きしめたからだ。そして唇がはなれて瑞貴は穏やかな表情を浮かべて告げる。

「…スズナ、初めて会ったときなんで俺がキスしたと思う？」

「えっ？ それはあんたが力が失ってたから」

「…違う。キスしなくてもお前の力は借りられたんだ」

「じゃあどうして？」

もう一度唇は塞がれる。それはさっきよりも深く強いものだった。

「…俺が霸王になったときに言うから待ってる」

今知りたい、そんな言葉が口から出てしまいそうだった。けどスズナは未来の霸王を信じた。

「分かったわよ…ちゃんと聞いたげるわよ！」

いつも以上にスズナは良い顔で笑った。

## 第五十四話：キスの理由と誓い（後書き）

はい、ここで霸王第一部は終了です！

次回からは「霸王」ユメビト編」と全く視点が瑞貴やスズナではなくなります。ですが、楽しみにしていてくださいね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5428d/>

---

霸王

2010年10月9日06時16分発行